

301
40



全
芥子園畫傳

四

始



301
40

全 譯

芥子園畫傳

第 四 冊
人 物 屋 宇 譜



小杉放庵 註解
公田連太郎 譯文

芥子園畫傳

第四冊 人物屋宇譜

東京アトリエ社刊行



30/40

芥子園畫傳第四冊人物屋宇譜目錄

點景人物 六十五式

綏步式	負手式	袖手式	拈鬚式	荷鋤式	把菊式	題壁式	對談式	撫松式	倚杖式
.....
三	三	三	四	四	四	五	五	六	六

繫杖式	指點式	曳杖式	對談式	據石式	臥讀式	臨流式	臥雲式	看雲式	坐石式	對酌式	觀書式
.....
一七	一七	一八	一八	一九	一九	二〇	二〇	二二	二二	二三	二三

芥子園畫傳 第四冊

擔柴式	擔囊式	遮傘式	携童式	策蹇式	御車式	肩挑式	回頭式	倚童式	對談式	負手式	曳杖式	携手式	聚立式	同行式
.....
四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	元	元	元	元	元	元	元	元

極小點景人物 十九式

折花式	携壺式	對坐三式	聚坐式	獨坐式	同行二式	對語二式	曳杖式	騎驢式	推車式	肩輿式	騎馬式	騎牛式
.....
四〇	四〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

極寫意人物 七式

携孫式	正面式	背面式	耕鋤式	對立式	折花式	聚坐式	對語式	醉扶式	把書式	倚石式
.....
四二	四二	四二	四二	四三	四四	四四	四四	四四	四四	四四

點景鳥獸 二十七式

滾馬式	雙馬式	負驢式	牧牛式	臥牛式	牧羊式	臥羊式	雙鹿式	鳴鹿式	臥犬式	吠犬式	飛鶴式	鳴鶴式	雙鶴式	雙燕式
.....
四九	四九	四九	五〇	五〇	五〇	五〇	五一	五一	五一	五一	五一	五一	五一	五一

栖鳥式	飛鴉式	雪鴉式	栖鴉式	鳩鴉式	鳴鴉式	雞鴉式	飛雁式	宿雁式	鷺浴式	欄鴨式	鵝泛式	墻屋正面式
.....	二十八式
壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	七

山齋層聳式	抱山面水式	水檻式	湖心亭橋式	一間書屋式	高軒三面式	層軒面水式	山凹遠屋式	樓殿正面式	樓殿側面式	樓閣高聳式	屋中遠樓式	屋中虛亭式	觀樓危樓式	遠望鐘樓式
.....
七	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

讀書池館式	石墻圍亭式	汎地斥堠式	俯江棧閣式	村庄茅屋式	河房式	遠露殿脊式	三間交架式	兩間交架式	一間茅屋式	兩間斜置式	兩間平置式	門逕法	柴門式
.....	十六式
壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹

石疊墻門式	磚墻門式	老樹土墻式	修竹柴扉式	藤冒柴扉式	破筆柴扉式	兩正一斜式	丁字屋堂式	返露門逕式	山家後門式	村野小式	斥堠式	豆棚式	花架式	水關式
.....
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七

城郭橋梁法 三十一式

- 正面城門式.....五
- 側面城門式.....五
- 轉折城角式.....五
- 城門廡舍式.....五
- 工細臺閣式.....五
- 八面臺閣式.....五
- 城邑門屋式.....七
- 寺觀結構式.....七
- 山門殿宇式.....七
- 池館廊廡式.....七
- 平居四列式.....七
- 遠望城樓式.....七
- 遠村落式.....七

- 遠屋脊式.....七
- 吳越橋式.....七
- 磯頭小橋式.....七
- 林下小橋式.....七
- 甌閩架屋橋式.....八
- 江南橋式.....八
- 園榭橋式.....八
- 平遠橋式.....八
- 平板橋式.....八
- 蜂腰板橋式.....八
- 駝峰板橋式.....八
- 曲板橋式.....八
- 齒缺板橋式.....八
- 水磨式.....八
- 跨泉架屋式.....八

寺院樓塔法 九式

- 亭內水車式.....三
- 井亭式.....四
- 桔槔式.....四
- 辟支塔式.....五
- 古塔式.....五
- 琉璃塔式.....五
- 無頂塔式.....五
- 遠塔式.....六
- 寫意塔式.....六
- 鐘樓式.....六
- 寺門式.....六
- 寺門石坊式.....六

界畫臺閣法 十二式

- 平臺崇樓式.....七
- 八面臺閣式.....六
- 遠殿式.....六
- 重軒列陸式.....九
- 廻廊曲檻式.....九
- 平臺式.....九
- 遠亭式.....九
- 八面亭臺式.....九
- 雕欄玉榭式.....三
- 宮闕門第式.....九
- 亭榭石橋式.....九
- 階陸式.....九

舟 楫 法 二十一式

湖船式	大船式	峽船式	捕魚式	叉魚式	抵岸式	江船式	載酒式	雨艇式	雙帆式	開船式	渡船式	泊船式
.....
九	九	九	七	七	七	七	六	六	六	五	五	五

器 具 法 二十六式

圓机式	板床式	藤床式	正長几式	正屏風式	垂釣式	擊槓式	持竿式	渡客式	撒網式	大小風帆式	巨艦式	櫓船式
.....
一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇〇	九

書架式	書案式	側長几式	圈椅式	藤床反面式	方机式	琴几式	長石書几式	方石棋几式	架瓶式	磁墩式	香几式	長卓式	脚榻式	石凳式
.....
一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇六	一〇六	一〇六

註 解

竹椅式	摺椅式	盆蘭式	側面屏風式	靠椅式	飯卓式
.....
一〇三	一〇三	一〇三	一〇四	一〇六	一〇六

註解 一〇七

山水の中の點景人物の諸式は
 太だ工なる可からず、亦、太
 だ勢無かる可からず。全く、
 山水と顯影する有るを要す。
 人は山を看るに似、山も亦、
 俯して人を看るに似たり。琴
 は須く月に輝かすべく、月も
 亦、靜に琴を聽くに似たり。
 方に觀者をして躍りて其内に
 入りて畫中の人と坐位を争は
 ざるを擬むる有らしむ。爾ら
 ざれば斯ち山は自ら山、人
 は自ら人にして、續つて倪幻
 畫の空山にして人無きの、妙
 たるに如かず。畫山水中の
 人物は、須く清くして鶴の如
 く氣めば仙の如くなるべし。
 半點の市井の氣を帯ぶ可から
 ず。煙霞の玷と爲るを致さん。
 今、行立坐臥觀聽侍從の諸式
 を將て、略ぼ一二を擧げ、并
 せて各々唐宋の詩句を上に標
 し、以て山水の中の畫人物は
 猶ほ作文の點題のごときを見
 はず。一幅の題は、全く人の
 身上より起る。古人の畫は、
 類れ題味有り。然れども標す
 る所の詩句、亦、某式は定め

山水中點景人物諸式不
 可太工亦不可太無勢全
 要與山水有顯影人似看
 山山亦似俯而看人琴須
 聽月亦似靜而聽琴方
 使觀者有恨不躍入其内
 與畫中人爭坐位不爾則
 由自山人自人儼不如倪
 幻畫空山無人之爲妙矣
 畫山水中人物須清如鶴
 望如仙不可帶半點市井
 氣致爲煙霞之玷今將行
 立坐臥觀聽侍從諸式略
 舉一二并各標唐宋詩句
 於上以見山水中之畫人
 物猶作文之點題一幅之
 題全從人身上起古人之
 畫類有題咏然所標之詩
 句亦不可泥某式定寫某
 句不過偶一舉之以待學
 者觸類旁通耳

閒賞步易遠
野吟聲自高



秋山負手行



爐薰袖手不知寒



て某句を寫すと混む可からず。偶々一たび之を擧げて以て學者が類に觸れて旁通するを待つに過ぎざるのみ。(註解百七頁參照)

閒賞、步速かり易く、野吟聲自ら高し。(閒賞は、しづかに遊びあるること。野吟は野外にて詩を吟ずること。)

秋山、手を負うて行く。(手を負ふは、手を背後に組み合はせること。)

爐薫、手を袖にして、寒きを知らず。(爐薫は袖香爐)

獨り蒼茫に立ちて自ら詩を咏す。(蒼茫は涯無き貌。ひろくとした處をいふ。)

明月に鑄を荷うて歸る。(陶淵明の詩句。明月は月明かなる夜。)

菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る。(陶淵明の詩句)

山を看て詩就れば旋ち壁に題す。(壁は、がけ。岸のけはしく直立する處。)

偶然隣叟に値ひ、談笑して還る期無し。(王摩詰の詩句。隣叟は隣家の老人。)

獨立蒼茫自咏詩



明月荷鋤歸



採菊東籬下
悠然見南山



看山詩就旋題壁



偶然值隣叟談笑無還期



孤松を撫して盤桓す。(陶淵明の辭の句。孤松は一本の松。盤桓は、たちもとほる。)

杖に倚りて鳴泉を聴く。(杖に倚るは、杖にすがること。鳴泉は水の音。)



撫孤松而盤桓



倚杖聽鳴泉

攜錢過野橋



指點寒鴉上翠微



錢を携へて野橋を過ぐ。(杜子美の詩の句。錢を携ふは錢を杖にかけたること。)

指點す寒鴉の翠微に上るを。(指點は指ざすこと。寒鴉は冬のからす。翠微は青とみかすみたる山の中腹をいふ。)

藜杖全吾道

藜杖、吾が道を全くす。
(あかざの杖をついて隱者の生活をすること。)



閒看入竹路自有向山心



高雲、片心を共にす。(高山の雲の如く、我が心も無心なり。)

高雲共片心



臥觀山海經



席を展べて長流に俯す。
(杜子美の詩句。席は、しきもの。長流は大川なり。)
 雲に臥して衣裳冷なり。
(杜子美の詩句。山中の雲氣の中に臥して、身うちのひやりとすること。)

展席俯長流



雲臥衣裳冷



行いては到る水の窮まる處、坐しては看る雲の起る時。(王摩詰の詩句)
 石を拂うて茶を煎るを待つ。(石を拂ふは石の上のほこりを拂つて石の上に坐るなり。)

行到水窮處坐看雲起時



拂石待煎茶



二人對酌山花開
（李太白の詩句）
時に還つて我が書を読む。
（陶淵明の詩句）



二人對酌山花開

時還讀我書



今日天氣佳清吹與彈琴



奇文共欣賞



今日天氣佳なり、清吹と
彈琴と。（清吹は笛を吹くこ
と。彈琴は琴をひくこと。）
奇文共に欣賞す。（陶淵明
の詩句。すぐれたる文章を
共にたのしみめづること。）

棋聲、永晝を消す。(碁を打つて永き日を過ごす)

晴臆檢點す白雲の篇。(杜子美の詩句。晴れたる日の窗の下に於て、在野の人の詩篇を點をつけて調べる。)

棋聲消永晝



晴臆檢點白雲篇



山澗清く且つ淺く、遇うて以て我が足を濯ふ。(山澗は、たにがは)

寂坐して正に詩を吟ず。(寂坐は、閑りさびしく坐ること)

坐して開く桑落の酒、來つて把る菊花の枝。(杜子美の詩句。河東の桑落坊に井有り。桑落つる時に至る毎に、水を取りて酒を醸すに、甚だ美味なり、故に桑落酒と名づく。)

山澗清且淺遇以濯吾足



寂坐正吟詩



坐開桑落酒來把菊花枝



勝事日に相對す、主人嘗て
獨り閒なり。(勝事はおも
しろきこと。)

一卷の氷雪の文、俗を避け
て常に自ら携ふ。(氷雪の
文とは、すぐれたる文章を
いふ。)

一卷氷雪文避俗常自携



勝事日相對主人嘗獨閒



柴を擔ふ式

歸漁の式(歸漁は魚を釣り畢
りて家に歸ること)

魚を釣る式

春耕の式(春耕は春の耕作)

擔柴式



釣魚式



歸漁式



春耕式



槳を蕩かす式

櫓を揺らす式

篙を持つ式

篙を撐ふる式

蕩槳式



搖櫓式



持篙式



撐篙式



濯足萬里流



江湖滿地一漁翁



足を濯ふ萬里の流（左太
神の詩句）

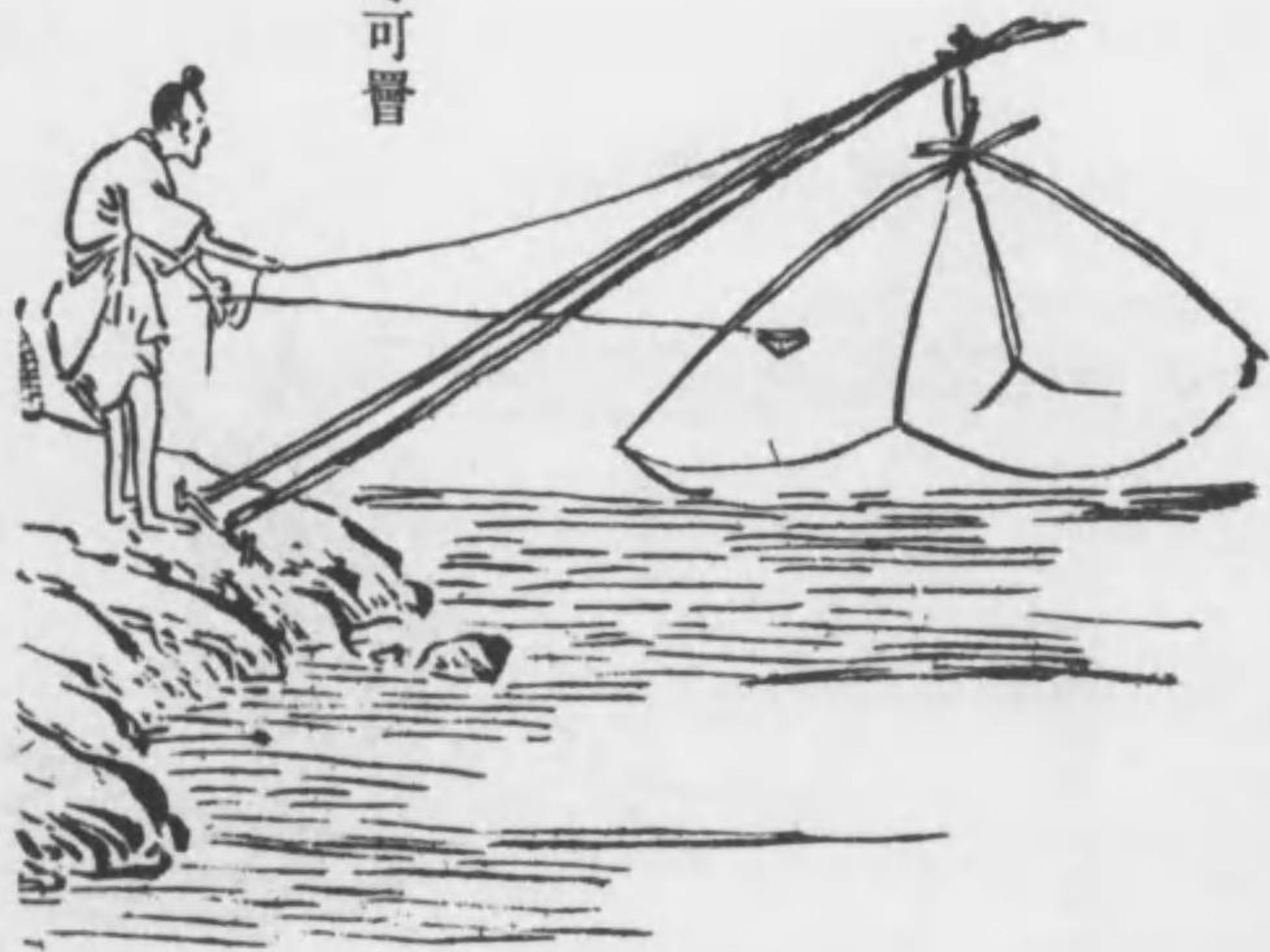
江湖滿地の一漁翁（杜子美
の詩句。江湖到る處に漁り
をする一老人。）

湖光、綠叢に上る。(湖の水の色が緑の叢にうつる。)蚊有れば寒けれども可し。(蚊退之の句。昔は、よつであみ)

湖光上綠叢



有蚊寒可曾



詩思は壩橋の驢子の背の上に在り。(都築の句。驢子はうさぎうま。)

詩思在壩橋驢子背上



征馬望春草
行人看暮雲



春郊見駱駝



春郊に駱駝を見る。(春郊は春の野邊)
花間に笛を吹きて牧童過ぐ。(牧童は、うしかひの子)

花間吹笛牧童過



提壺式



抱瓶式



壺を提ぐる式

瓶を抱く式

書を捧ぐる式

茶を捧ぐる式

捧書式



捧茶式



硯を捧ぐる式

琴を抱く式

地を掃ふ式

花を折る式

捧硯式



抱琴式



掃地式



折花式



洗蓋式



抱膝式



洗薬式



煎茶式



壺を洗ふ式

膝を抱く式

茶を煎る式

薬を洗ふ式



行囊を擔ふ式。(行囊は旅行の荷物。)

書を負ふ式

馬を牽く式

書を擔ふ式

擔行囊式



負書式



牽馬式



擔書式



獨坐の式

兩人對坐する式

竿を垂るる式。(竿は釣竿)

兩人、雲を見る式

四人坐して飲む式

獨坐して書を觀る式

膝を促す式。(膝を促すは、ひざをつきよせる)

蹴鞠の式。(蹴鞠は結鞠、蹴坐、坐禪すること。)

獨坐式



兩人對坐式



垂竿式



兩人看雲式



獨坐觀書式



四人坐飲式



促膝式



蹴鞠式



阮を撥する式。(阮を撥すは、阮成(樂器の名)をひくこと。)

丹を焼く式。(丹は仙人の藥)

漁家聚まり飲む式。(漁家は魚を取る人)

笛を吹く式

魚を釣る式

絃を鳴らし笛を吹く式

獨り坐して花を看る式

撥阮式



燒丹式



吹簫式



漁家聚飲式



釣魚式



鳴絃吹笛式



獨坐看花式



同行の式

杖を曳く式

頭を回らす式

三人對して立つ式

手を携ふる式

童に倚る式(童子によりかかると)

手を負ふ式

對談の式

同行式



曳杖式



回頭式



三人對立式



携手式



倚童式



對談式



負手式



肩に挑ぐる式(物をになふ)

車に御する式(車に乗る)

童を携ふる式(童子をつれる)

柴を擔ふ式

囊を擔ふ式

蹇に策うつ式(うまにのる)

傘を遮す式

壺を携ふる式

花を折る式

肩挑式



御車式



携童式



擔柴式



策蹇式



擔囊式



携壺式



遮傘式



折花式



兩人對坐式



兩人行立式



獨坐式



三人對坐式



一人行立式



一人行立の式

杖を曳く式

三人對坐の式

獨坐の式

兩人行立の式

兩人對坐の式

驢に騎る式
 車を推す式
 背面の式
 正面の式
 牛に騎る式
 孫を携ふる式
 肩輿の式
 馬に騎る式
 地を耕す式



極寫意の人物の式

數式は尤も寫意の中の寫意なり。筆を下すこと、最も、飛舞活潑なること書家の張顧の狂草の如くならんことを要す。然れども草書を以て眞書に較ぶれば難しと爲す。故に古人曰く、刻勿として草書に明あらずと。草書を以て楷畫に較ぶれば、尤も難しと爲す。故に寫と曰ひ、而して必ず系けて意と曰ふ。以て意無ければ便ち筆を落す可からざるを見はす。必ず須く目無くして而も視るが若く、耳無くして而も聴くが若く、一筆兩筆の間に旁見側出すべし。筆を劃り簡に就き、而して至簡に就けば、天趣宛然として、宛に數十百筆の寫し出すこと能はざる所の者有り。而して此一兩筆忽然として得れば、方に發に入ると爲す。(註解百七頁參照)

極寫意人物式
 數式尤寫意中之寫意也下筆最要飛舞活潑如書家之張顛狂草然以草書較眞書爲難故古人曰勿勿不暇草書以草畫較楷畫爲尤難故曰寫而必系曰意以見無意便不可落筆必須無目而若視無耳而若聽旁見側出於一筆兩筆之間刪繁就簡而就至簡天趣宛然寔有數十百筆所不能寫出者而此一兩筆忽然而得方爲入微









春郊の滾馬（ころびまはる馬）の式

雙馬（二頭の馬）泉に飲む式

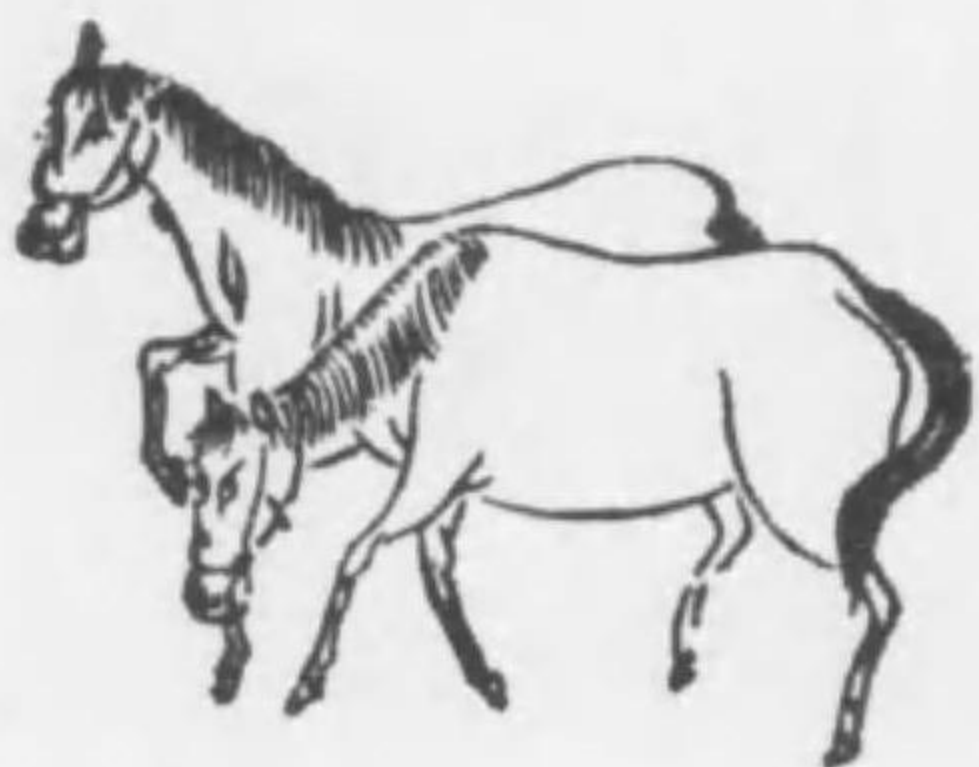
負驢（人をのせる驢）の式

山水の中の鳥獸の各式。此種は細事に屬すと雖も、然れども關する所は甚だ大なり。如し春を畫かんとせば、春の畫は、第一の鳴鳩・乳燕を畫くを出でず。春に非ずして何ぞ。如し秋を畫かんとせば、秋の畫は第一の飛鴻宿雁を畫くを出でず。秋に非ずして何ぞ。然れども此れは猶は山樹に於て、以て分別す可き者なり。鳴を畫かんと

春郊滾馬式



雙馬飲泉式



負驢式



山水中鳥獸各式此種雖屬細事然所關者甚大如要畫春春畫不出第一鳴鳩乳燕非春而何如要畫秋秋畫不出第一飛鴻宿雁非秋而何然此猶於山樹可以分別者也至

要するに至つては、曉の畫は第だ棲鳥、林を出で、吠起、戸を守るを畫くを畫くを畫く。曉に非ずして何ぞ。暮を畫かんと要せば、暮の畫は第だ雞、鳩に棲み、禽、樹に藏るるを畫くを畫く。暮に非ずして何ぞ。將に雨ふらんとすれば則ち鶴鳴き、將に雪ふらんとすれば則ち鴉陣するより、以て牛馬が上下風を知るの類に及ぶ。畫中の生動は、全然、此に在り。(註解百八頁參照)

白羊の行臥の式 (白羊の行いて居るものと臥して居るの式)
 牧牛(野かひの牛)の行臥の式

雙鹿(二頭の鹿)の式
 鳴鹿(鳴いて居る鹿)の式
 臥犬(れて居る犬)の式
 吠犬(ほえて居る犬)の式

要畫曉曉畫不出
 第畫栖鳥出林吠
 彪守戸非曉而何
 要畫暮暮畫不出
 第畫鷄栖于樹禽
 藏于樹非暮而何
 將雨則鶴鳴將雪
 則鴉陣以及牛馬
 知上下風之類畫
 中生動全然在此



牧牛行臥式



白羊行臥式



雙鹿式



鳴鹿式



吠犬式



臥犬式



飛鶴(飛んで居る鶴)の式

雙鶴(二羽の鶴)の式

鳴鶴(鳴いて居る鶴)の式

飛鶴式



鳴鶴式



雙鶴式

雙燕の顔顔(飛び上り飛び下る)の式

の式

栖鳥(木にとまつて居る鳥)の式

雙燕顔顔式



栖鳥式



飛鴉（飛んで居るからす）の式

雪鴉（原本に雪を雷に作れるは誤）の式

栖鴉（木にとまって居るからす）の式



柳陰鸚鵡（ははつてう）の式
（柳にとまって居る鸚鵡）

鳴雞（鳴いて居るにはとり）の式

雞雛（にはとりのひな）の式



飛雁の式

平沙の宿雁の式（平かなる沙の上に雁がやすんで居る）

汀洲の鷺浴の式（うきすに鷺が水をあびる）

竹欄に鴨を養ふ式（竹矢來の中に鴨をかよ）

春水に鵝を泛ぶる式（春の水に鵝がおよいで居る）

飛雁式



平沙宿雁式



汀洲鷺浴式



春水泛鵝式



竹欄養鴨式

穿插して屋を畫く法

凡そ山水の中の堂戸有るは、猶ほ人の眉目有るがごときなり。人、眉目無ければ、則ち盲癩と爲す。然れども眉目は佳なりと雖も、亦、安放宜しきを得るに在り。眉目は少く可からず、正に多くす可からざる者なり。假に若し人有りて通身是れ眼ならば、則ち一の怪物と成らん。尾を畫くに其地勢と穿挿の向背とを審にするを知らず、徒に層層として相疊むを事とせば、何を以て是れに異ならん。吾故に謂はく、凡そ房屋の畫法は、必ず須く山水の面目の在る所を審み、穿挿にすべし。天然に自ら結穴有り。大にしては數丈の畫、小にしては盈寸の紙、其の人居を安置する、只だ一處兩處を得るのみ。山水、人居有れば、則ち情を生ず。人居を屋簷にすれば、則ち軸らし井の氣なり。近日の畫中、虛舎を安頓して安貼なる者は、偏に數人有るのみ。此數人の外は、山水は工なりと雖も、

穿插畫屋法

凡山水中之有堂戸猶人之有眉目也人無眉目則爲盲癩然眉目雖佳亦在安放得宜眉目不可少正不可多者假若有人通身是眼則成一怪物矣畫屋不知審其地勢與穿挿向背徒事層層相疊何以異是吾故謂凡房屋畫法必須端詳山水之面目所在天然自有結穴大而數丈之畫小而盈寸之紙其安置人居只得一處兩處山水有人居則生情厯雜人居則純市井氣近日畫中安頓虛舍安貼者僅有數人耳此數人外山水雖工而其所畫人居非螺螄精



所謂眉目者門戶則眉堂與其目也眉宜修故牆宜委曲環抱目不宜過露故內屋宜斂氣含虛其式有二上式宜於平地下式則因山壘茸矣餘倣此

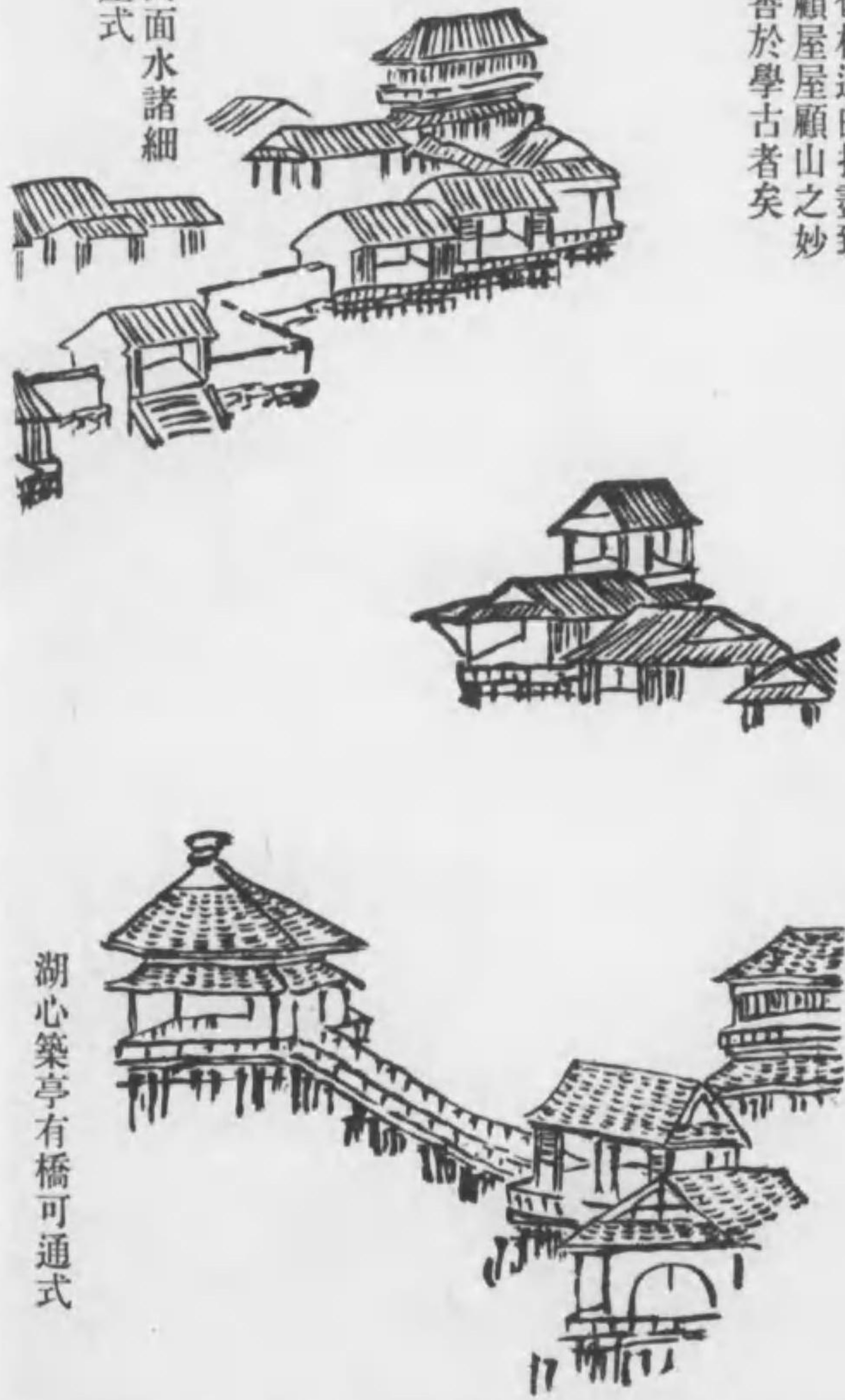
而其の畫く所の人居は、婦
孀に非ざれば、則ち小兒の
土を疊れて戯と爲す者にして
全く結構無し。往に姚簡叔、
畫を作る、即ち黍粒大の屋一
二間なるも、亦必ず前後相通
じ、曲折、致を盡し、山、
屋を顧み、屋、山を顧みるの
妙有り。古を學ぶに善き者と
謂ふ可きなり。

謂はゆる眉目とは、門戸は則
ち眉、堂奥は其目なり。眉は
修きに宜し。故に境は委曲環
抱するに宜し。目は過露なる
に宜しからず。故に内屋は、
氣を斂め處を含むに宜し。其
式、二有り。上式は平地に宜
し。下式は別ち山に因りて疊
昇す。儼は此れに倣へ。(註
解百九頁參照)

山を抱き水に面する諸の
細なる瓦屋(繪密なる瓦ぶき
の家)の式
水檻(水に臨んで居る手すり)
と兩岸と相對する畫法
湖心(池のまんなか)に亭を
築き、橋有り通す可き式

則小兒壘土爲戲者全
無結構往姚簡叔作畫
即黍粒大屋一二間亦
必前後相通曲折盡致
有山顧屋屋顧山之妙
可謂善於學古者矣

水檻兩岸相對畫法



抱山面水諸細瓦屋式

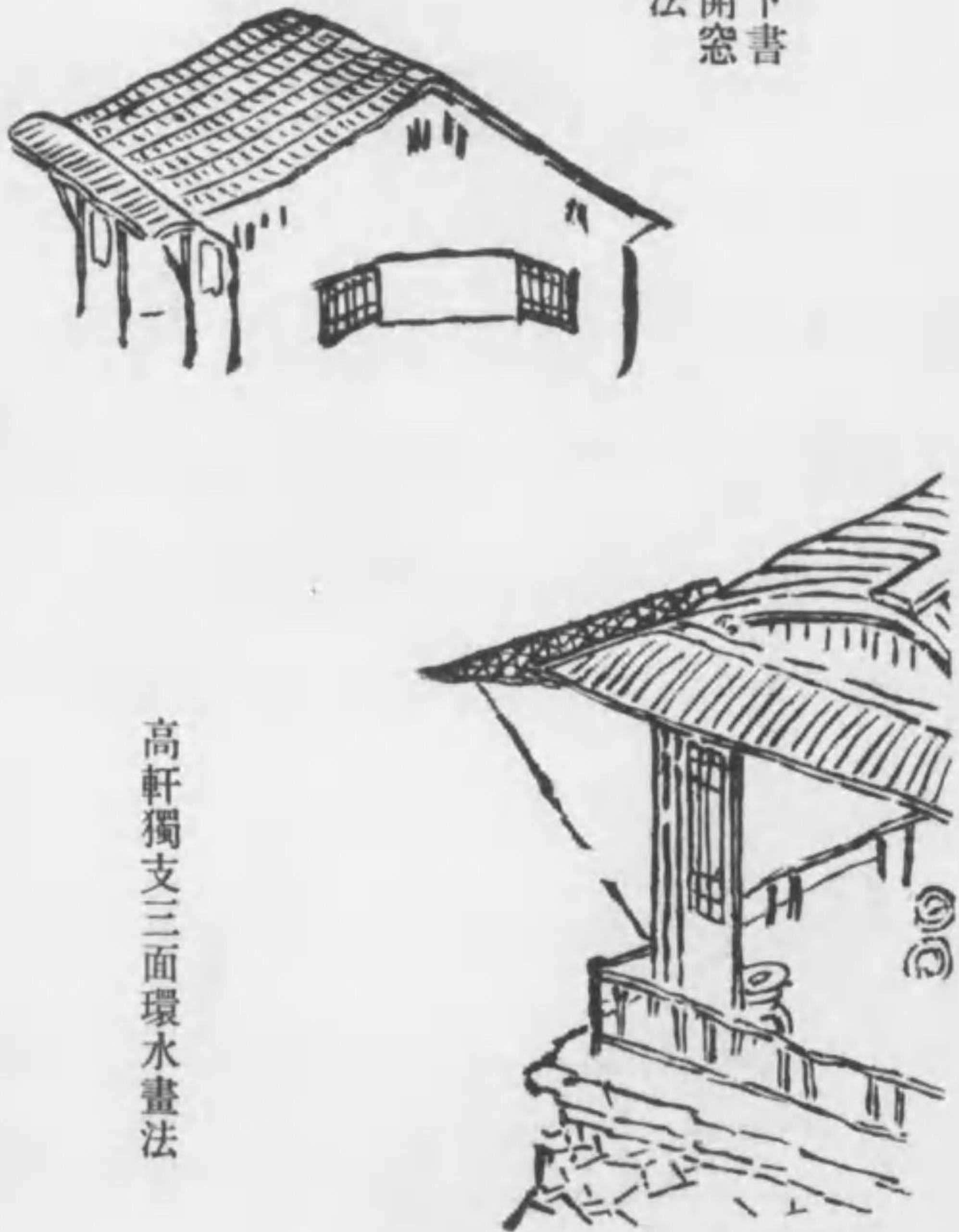
湖心築亭有橋可通式

或は竹中、或は桐下に、書
屋(書齋)獨り聳え、四圍(四
方)に窓を開き、面面に景
有る(各方面に眺望有る)畫
法

或竹中或桐下書屋獨聳四圍開窓面面有景畫法

高軒獨り支へ(のきが高く
ぬきんでる)、三面に水を環
らす畫法

高軒獨支三面環水畫法



此處或は滄(ぼかす)するに叢樹(むらがりたる木立)を以てし、或は枕するに石壁(石のきりぎし)を以てする、皆可なり。

層軒(二階家ののき)、水に面する畫法

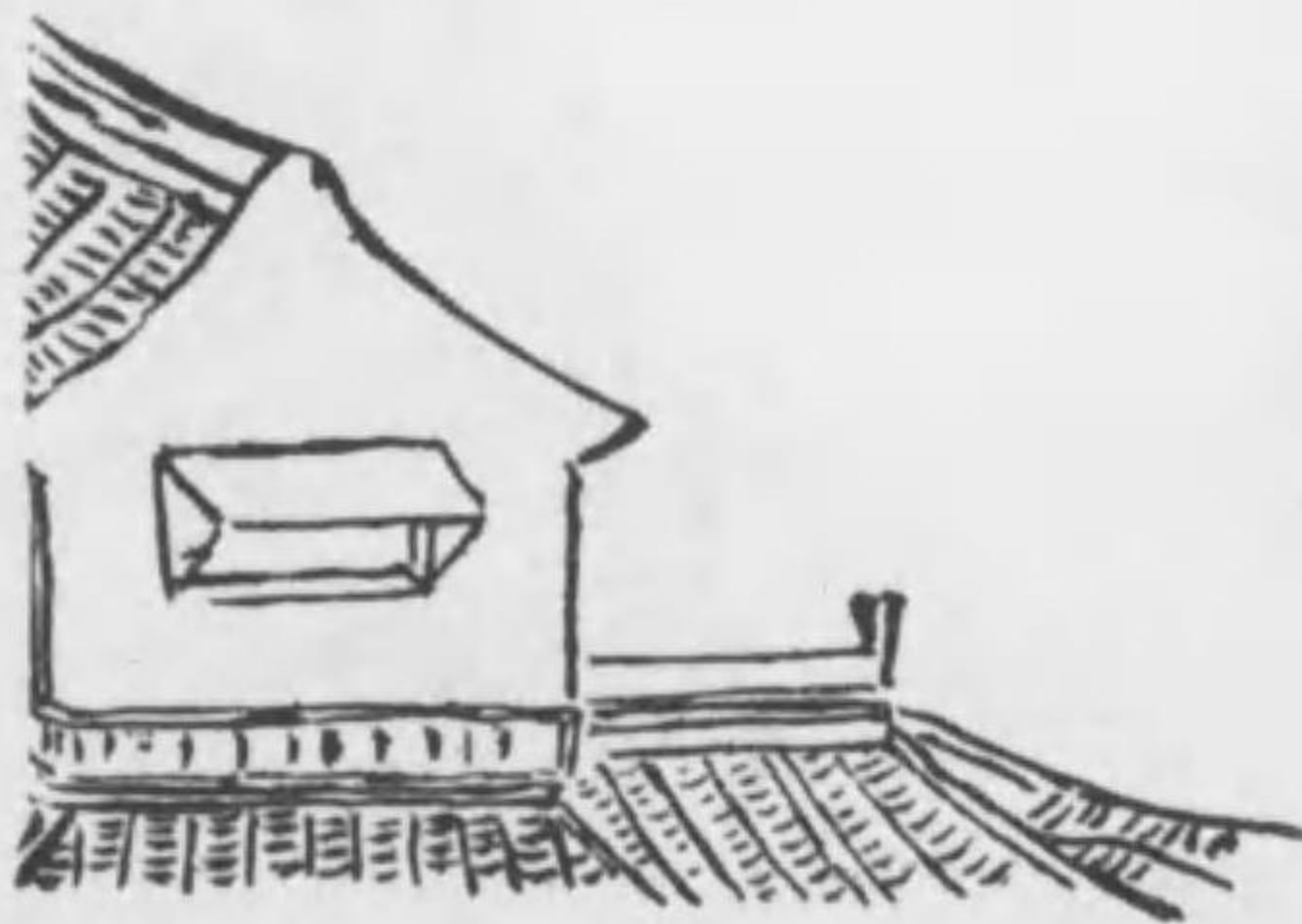
山凹(さんこう)の桃柳の中に、此れを置きて以て遠景を收む。(山のくぼみの桃や柳の中に此れを書き入れて、遠き景色を取り込む)

此處或滄以叢樹或枕以石壁皆可



層軒面水畫法

山凹桃柳中置此以收遠景



樓殿の正面(まむき)の畫法

樓殿の側面(よこむき)の畫法

樓閣高く聳えて以て遠景を收むる法

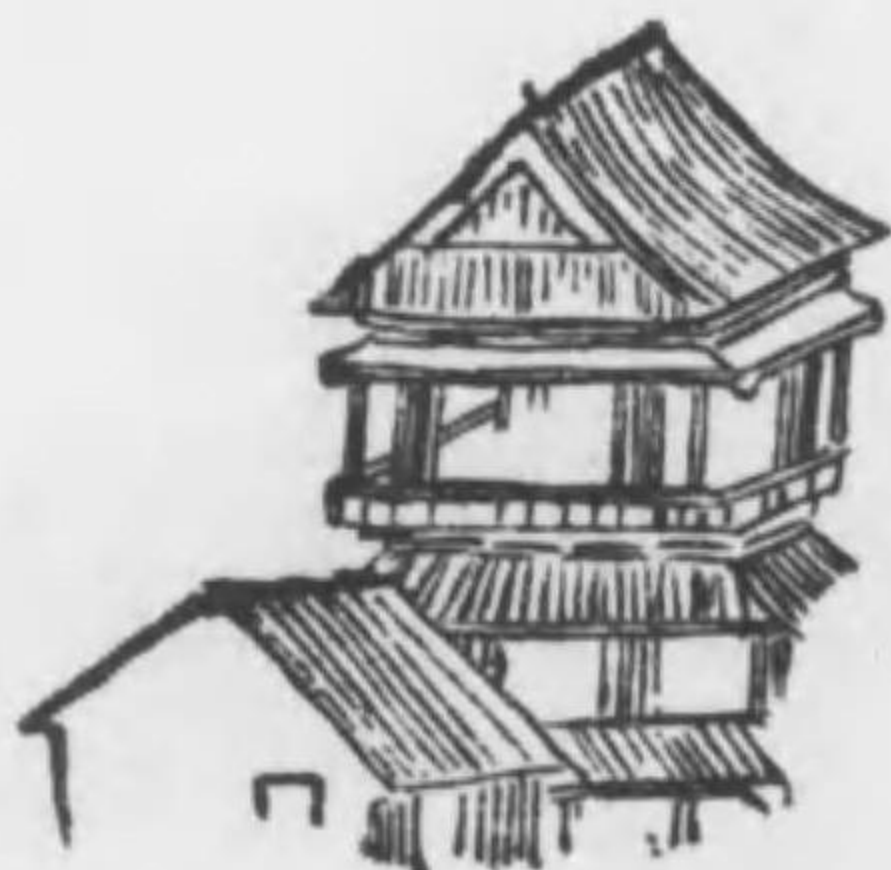
樓殿正面畫法



樓殿側面畫法



樓閣高く聳て以て遠景畫法



平屋虛亭畫於水邊林下
楚楚有致



鄉間村落多以平屋叢脊
中聳危樓峻閣可以觀穫
可以捫雲



平屋(低き家)虛亭(高き家)、
水邊林下に畫き、楚楚(さつ
ぱり)として致有り。
鄉間村落(むなかのむらざと)
には、多く平屋を以てし、叢
脊(多くの家の建て込みたる
ところ)の中に、危樓峻閣
(高く拔んでたる二階家)を聳
かし、以て樓(收獲)を観る可
く、以て雲を捫づ(雲に手が
届く)可し

遠望鐘鼓樓式



讀書池館式



園居石牆極樸而其間亭閣極華式



遠く望める鐘鼓樓(鐘や太
鼓を撃つたかどの)の式
讀書池館(池邊の家)の式
園居の石牆は極めて樸こに
して、其間の亭閣は極めて
華なる式。(むなかに在る別
荘の石の塙は極めて素樸で
あり、其中に在る建築物は
極めて華麗なるを畫く法
式)

汎地(兼管兵の分防の地)の斥
築(ものみ)、江景の中に最も
宜し。(大江の景色の中に書
き入れるに最も宜しい。)

棧閣は宜しく蜀道及び江に
俯する絶壁の下に畫くべし。
(がけに倚りてつくつた家は
蜀の道及び大江に臨んで居る
絶壁の下に畫くが宜しい。)

夏景の村庄茅屋(るなかのか
やぶきの家)の式。中に近衛
に於て設けて、遮陰(ひよけ)
の在る有り。

河房(河邊の家)の式

汎地斥塚江景中最宜



棧閣宜畫于蜀道
及俯江絶壁之下



夏景村庄茅屋式中於近
窓設有遮陰在也

河房式



遠く殿脊(屋のみれ)を露は
す法

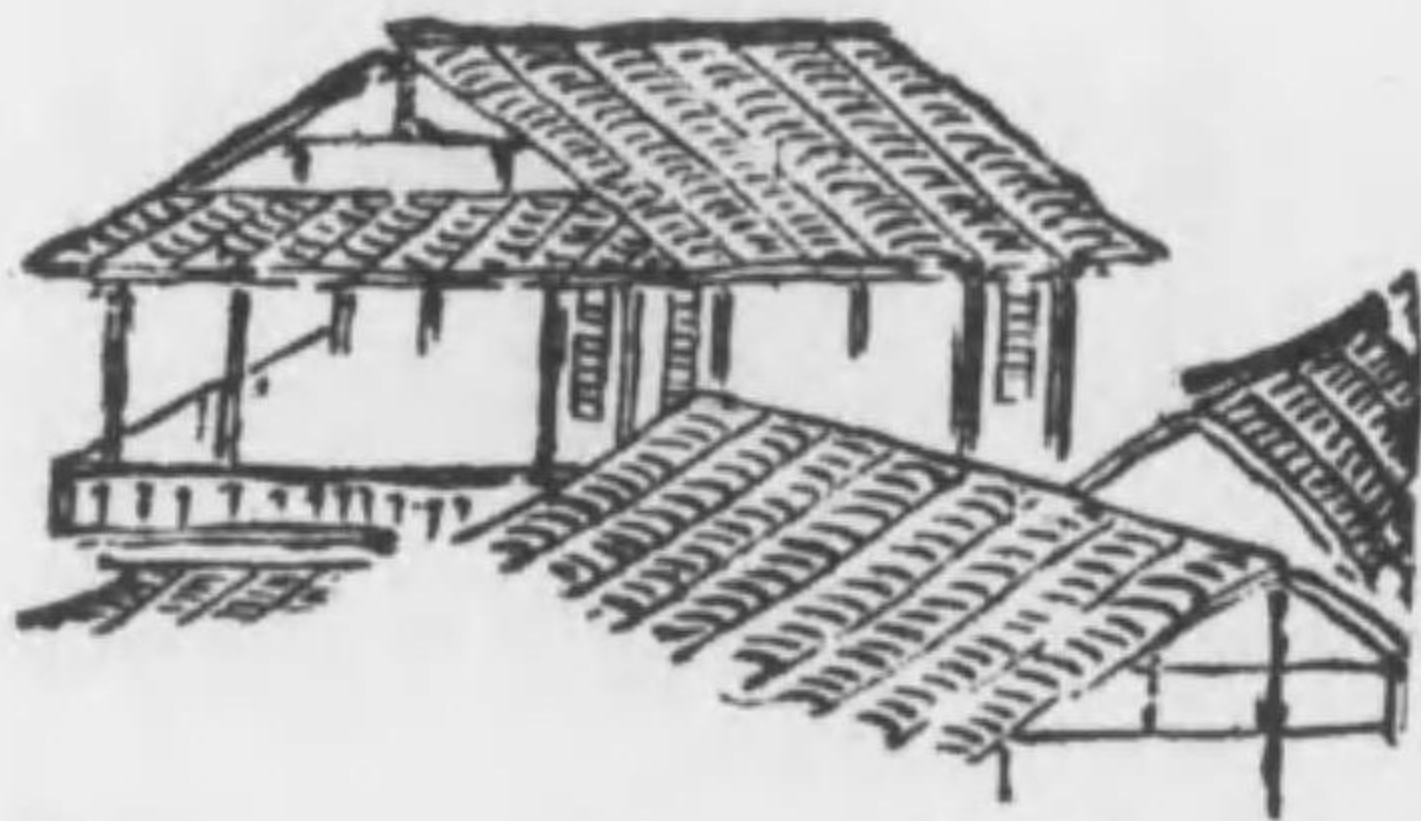
三間の交架の瓦屋の法。
(瓦ぶきの屋根が三げん組
み合はせてある)

兩間の交架の瓦屋。(瓦ぶ
きの屋根が二げん組み合は
せてある)

遠露殿脊法



三間交架瓦屋法



兩間交架瓦屋



茅屋兩間の平置の法。(二けんの茅ぶき屋根を並べて置いてある)

茅屋兩間の斜置の法。(二けんの茅ぶき屋根を斜に置いてある)

茅屋一間の畫法。(一けんの茅ぶき屋根の書きかた)

茅屋兩間平置法



茅屋兩間斜置法



茅屋一間畫法



門運を畫く式

山中の人は、必ずしも其堂奥を歴て始めて幽閑を見るにあらざるなり。須く門運の間にて早く望みて有道の處たるを知り、人をして三顧の想を起さしむべし。此の如くにして方に能手と爲す。(註解 百十頁参照)

畫門運式

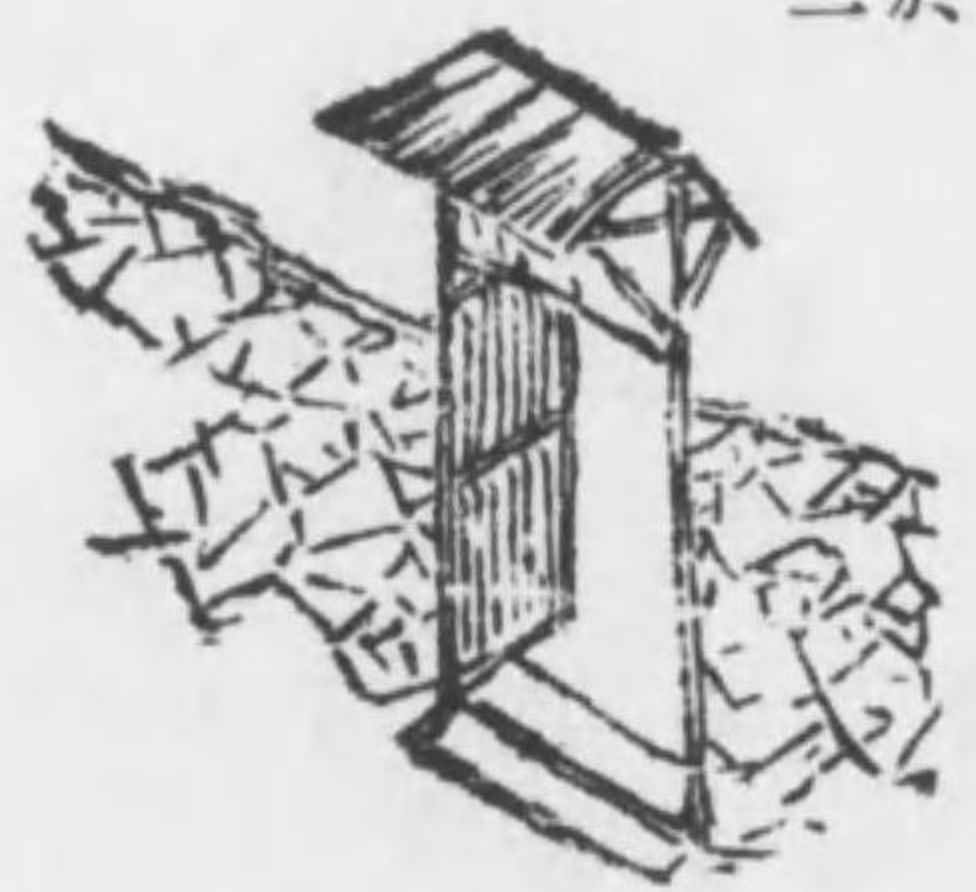
山中人不必歷其堂奥始見幽閑也須於門徑間早望而知爲有道之處使人起三顧想如此方爲能手

亂石にて疊める虎皮牆門の法。(石を積み果れたる虎の皮の斑文の如き塀増ある門を畫く法。疊の字は原本には誤つて疊に作る。)

磚牆門の畫法。(磚即ち煉瓦の類を並り込かたる塀ある門を畫く法)

柴門の畫法。(柴を以て作りたる門を畫く法)

亂石疊虎皮牆門法



磚牆門畫法



柴門畫法



老樹土牆(老木ある土の塙)の畫法

修竹柴門(竹林に沿ひたる柴の門)の畫法



老樹土牆畫法



修竹柴門畫法

柴屏、藤罩ひ、石礎、草埋め、瓦は斷鱗に比し、壁は龜甲の如し。極めて荒蕪たる中に於て、極めて生動するの氣有り。惟だ王叔明の擅場なり。凡そ雨景雪景を畫くに、之を用ふ可し。(註解百十頁參照)

柴屏藤罩石礎草埋瓦
比斷鱗壁如龜甲於極
荒蕪中有極生動之氣
惟王叔明擅場

凡畫雨景雪景可用之



破筆を以て屋を畫く、極めて古雅なり。然れども惟だ蒼澗たる寫意の山水の中に於てのみ、始めて宜しく之を位置すべし。(ばさ筆を以て家屋を畫くは、極めて古雅なる風韻があるけれども、これは如何なる畫面にでも用ひられるのでは無く、唯だざつとしたる寫意の山水畫の中に於てのみ、これを取り合はせて宜しいのである。)

以破筆畫屋
極古雅然惟
於蒼澗寫意
山水中始宜
位置之

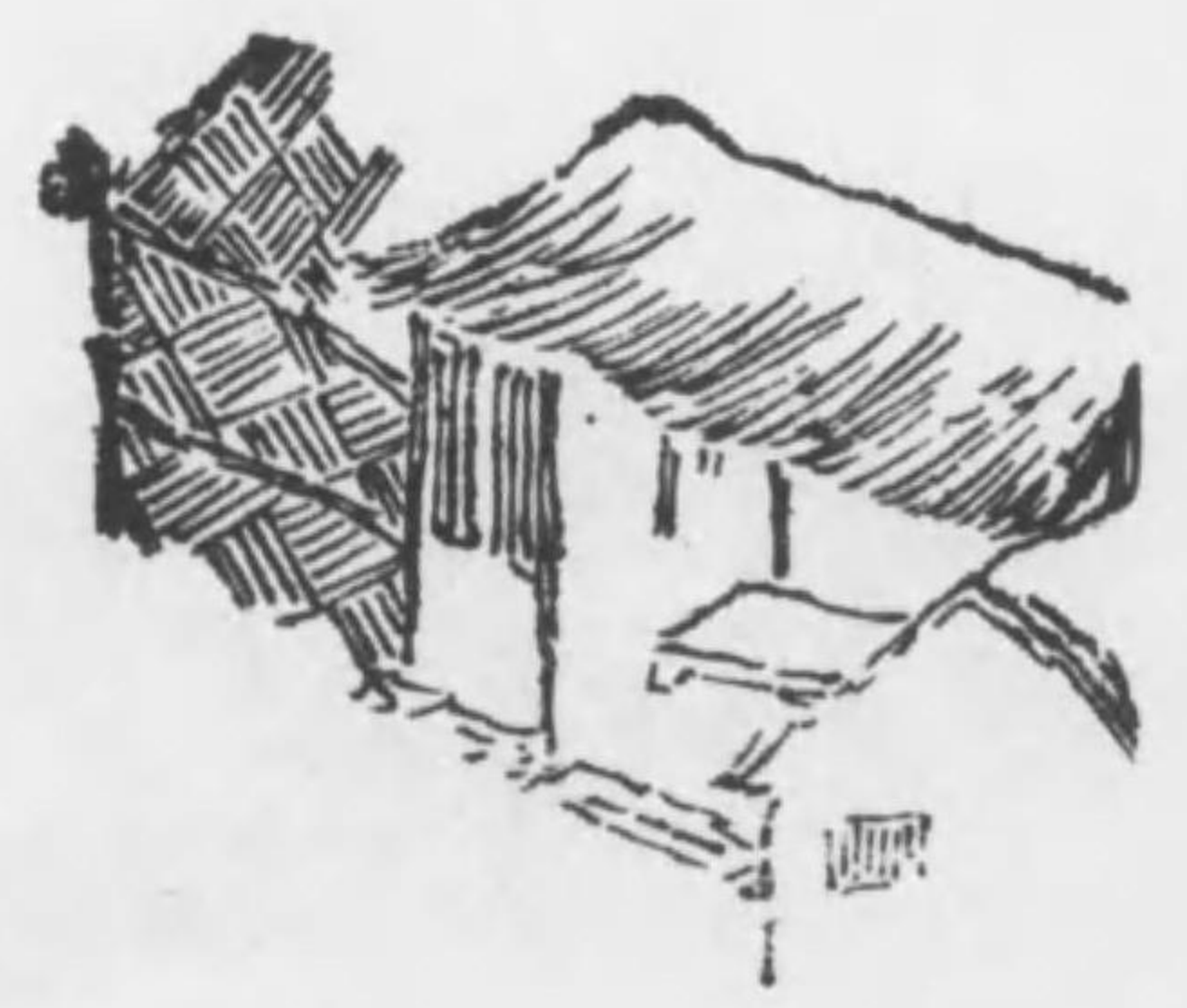


兩は正しく一は側なる屋堂(二軒は正面、一軒は横向なる家屋)の畫法
丁字の屋堂(檜木なりに並んで居る家)の法

兩正一側屋堂畫法



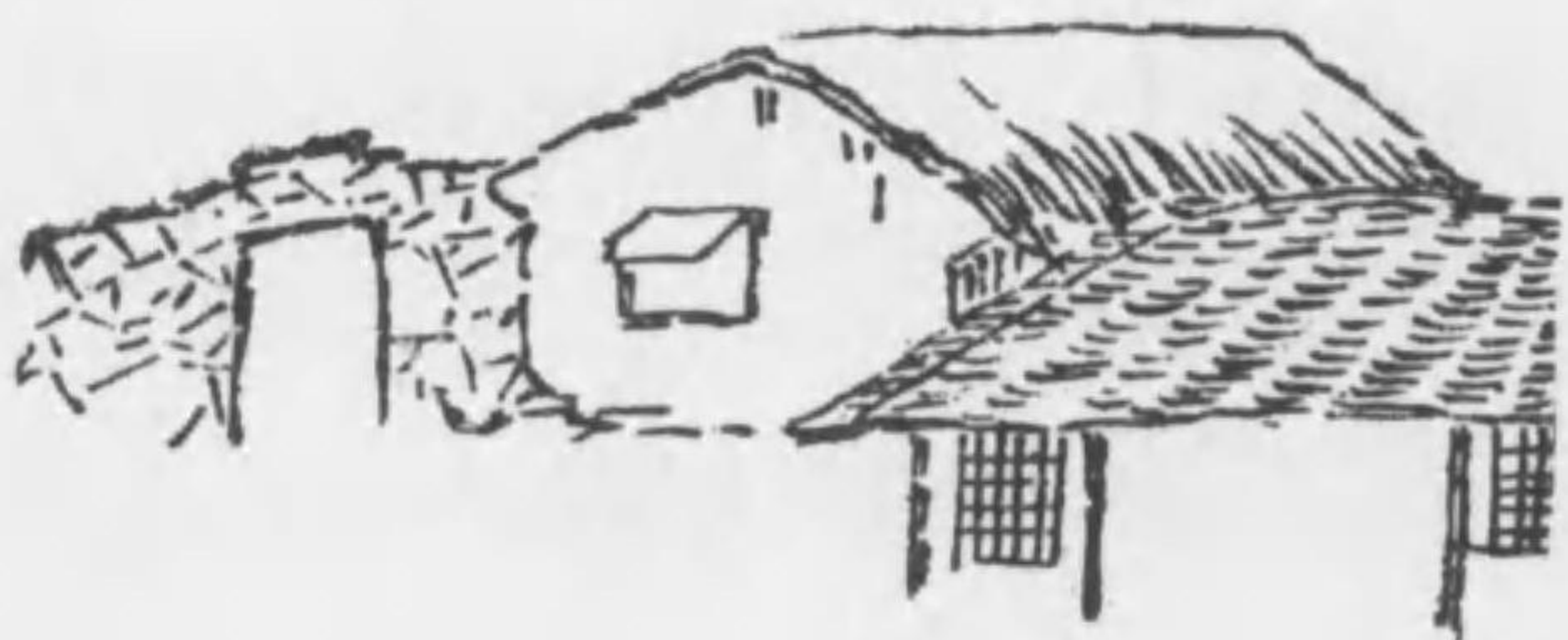
丁字屋堂法



門内より反つて門逕を畫き出す法。然れども必ず須く四圍に樹有りて層層として遮掩すべし。(門の内からふりかへつて門の入口を畫き出す法。けれども必ず周圍に樹木が有つて幾重にも遮り掩うて居ることを要する。)

石側樹底に山家の後門を露出する法。(石の側や樹の下に山家の裏門をあらはし出す法。)

自門内反畫出門逕法然必須四圍有樹層層遮掩



石側樹底露出山家後門法

邨野の小景の法

瓊樓玉宇は固より以て神仙を居らしむる所なり。而して豆棚・瓜架・清絶の地も、亦復た神仙に譲らず。故に樓臺の後に於て、即ち之に次ぐに邨野の小景を以てし、以て畫を作るには猶ほ宜しく淡處に於て多く眼を著くべきを見ず。製ふこと勿れ、拘はること勿れ。凡そ天地の間の有らゆる物は、皆、我に剪裁せられて畫に入る可し。(註解百十頁参照)

邨野小景法
瓊樓玉宇固所以居神仙而豆棚瓜架清絶之地亦復不讓神仙故於樓臺後即次之以邨野小景以見作畫猶宜於淡處多着眼勿製勿拘凡天地間所有之物皆可爲我剪裁入畫

豆棚(豆だな)の式
斥埃(ものみ)の式

斥埃式



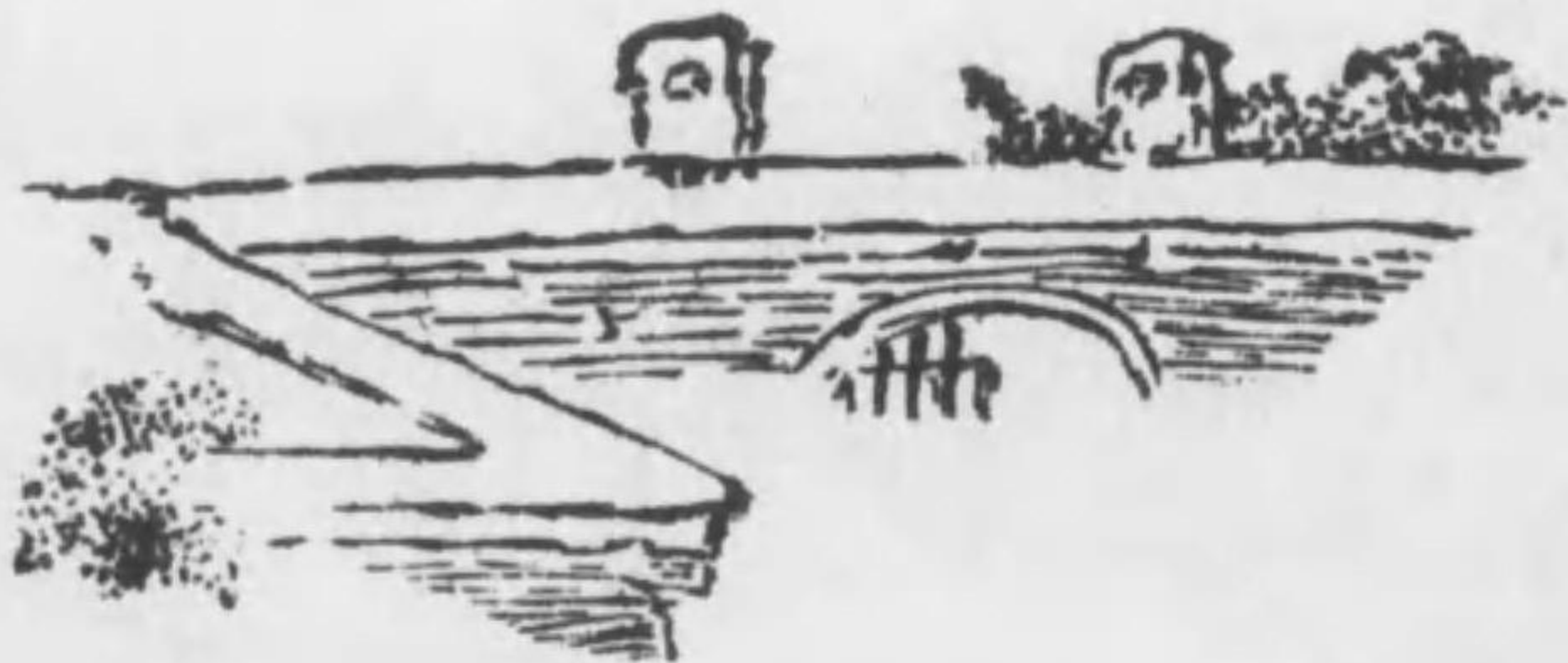
豆棚式



花架(花だな)の式
水關(みせき)の式



花架式



水關式

或は江を環り、或は山を抱き、勢(地勢)に因りて城を築く畫法

正面の城門の畫法

側面の城樓(城のものみやげら)の畫法



或環江或抱山
因勢築城畫法



正面城門畫法



側面城樓畫法

工細に頂を攢むる小樓閣（めんみつに屋のみれを畫きたる小き樓閣）の畫法

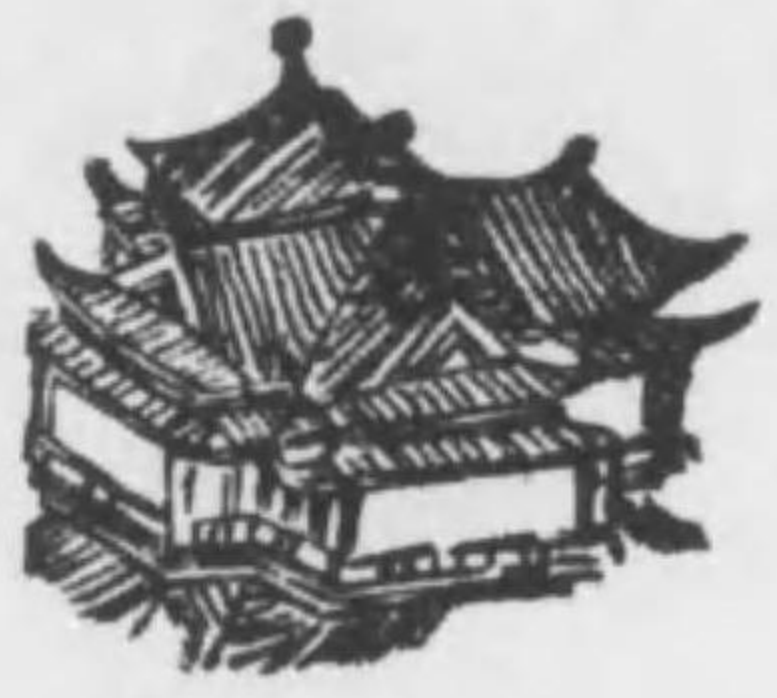
臺上に臺を築ける極めて細小（めんみつ）なる樓閣の畫法

廬舎四もに擁する城郭（家屋が周圍を取り巻きたる城郭）の畫法



臺上築臺極細小樓閣畫法

工細攢頂小樓閣畫法



廬舎四擁城郭畫法



此三式は、極めて小にして極めて精工（精細工致）なる者に係る。細畫（密畫）の中に、擇びて之を用ふ

城邑の門屋全く露はるる式。（城の中の家屋が皆露はれ見ゆるを畫く法式。）

寺觀及び宮殿の極めて小極めて細なる結構の式。（細は精細なること。結構は組み立てかた。）

寺觀、山門より大殿・後閣に至るまで、樓閣層層として全く露はるる式。（寺は佛教の寺院。觀は道教の殿堂。大殿は本堂。後閣はうしろの樓閣。）



城邑門屋全露式

寺觀及宮殿極小極細結構式



寺觀由山門至大殿後閣層層全露式



此三式係極小而極精工者細畫中擇用之

此六式は、極めて小にして結構有る者。或は山を隔て或は江に對する遠景の中に、擇びて之を用ふ。

遠く望める村落の層層として勾搭するを畫く式。
(勾搭は重なり合ふこと。)

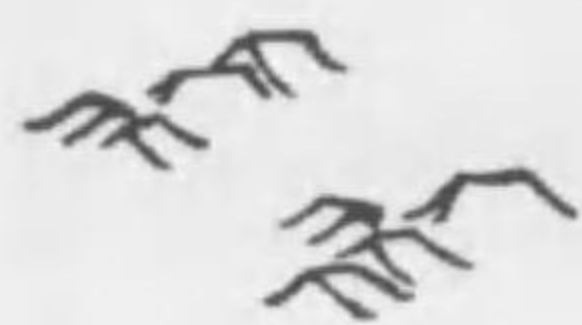
遠く望める平居(ひらや)の四列(四方にならぶ)せるを畫く式

遠く望める城樓の式

池館の廊廡の高低顧眄し首尾連絡せる式。(池に臨める館舎の廊下や廡の高きあり低きあり前後左右連続したるを畫く法式。)

此六式極小而有結構者或隔山或對江遠景中擇用之

畫遠望平居四列式



畫遠望村落層層勾搭式



遠望城樓式



池館廊廡高低顧眄首尾連絡式



橋を畫く法

絶澗・陡崖は、橋を以て氣を接す。最も少く可からず。凡そ橋有る處は、即ち人跡有り。荒山の比に非ず。然れども位置は各々宜しく思むべき有り。石薄くして脊凸隆すること早の如き者は、吳漸の橋なり。橋上に屋を架し、壓するに重き石柱を以てして、舟楫の相觸むを防ぐ者は、閩粵の橋なり。更に危梁の陡く聳ゆる者有り、險壑に宜し。薄石の横さまに擔する者は、平沙に宜し。他は類推す可し。(註解百十一頁)

吳山越水には宜しく此橋を設くべし。

此二橋は、勢宜しく磯頭林下に置くべし。(磯頭は波打ち際に石ある處。)

畫橋法

絶澗陡崖以橋接氣最不可少凡有橋處即有人跡非荒山比然位置各有宜忌石薄而脊凸隆如阜者吳漸之橋也橋上架屋壓以重石柱而防奔湍相觸者閩粵之橋也更有危梁陡挿者宜於險壑薄石橫擔者宜於平沙他可類推

吳山越水宜設此橋



此二橋勢宜置磯頭林下



甌閩間の橋の上には悉く屋有り。(甌閩は福建省の地。屋は屋根。)

江南の、城郭に近き者は、其橋平坦にして、車輿に便なること、半ね此の如し。

此橋は宜しく園榭(別荘)に設くべし。

甌閩間橋上
悉有屋



江南近城郭者其橋平坦便於車輿率如此



此橋宜設於園榭

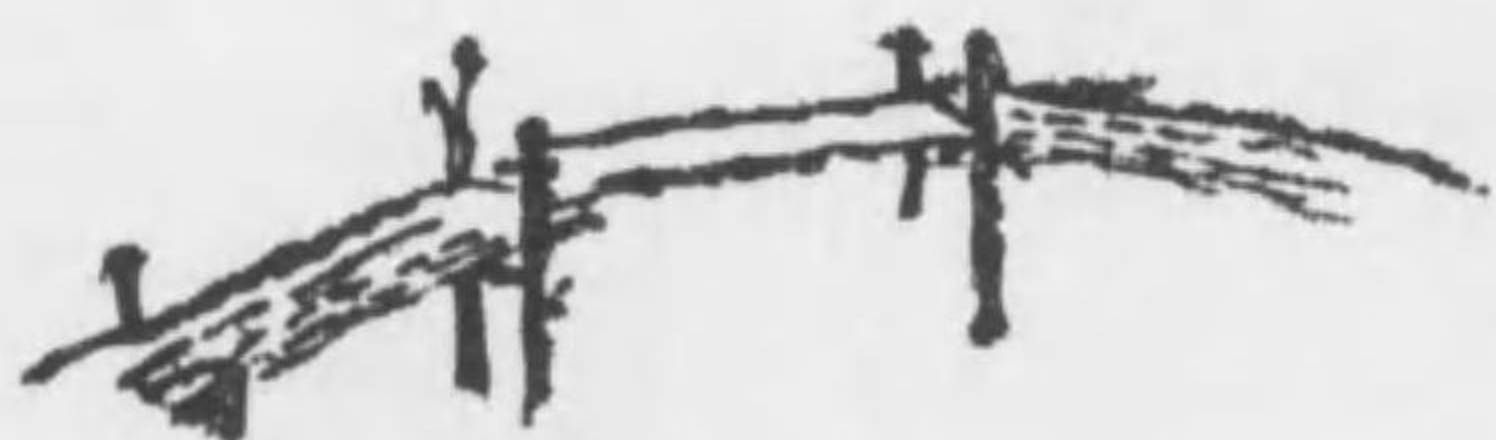


桑間籬落淺巘平田居人隨意
橫杓便於婦子非上可以過車
馬而下可以行舟楫者板橋之
勢畧計有四

平板橋宜於杏
花楊柳



蜂腰板橋宜於
山河近岸



駝峯板橋宜於近
江支港水雖小而
實可行舟者



桑間の籬落、淺巘の平田に、居人、意に隨つて杓を横たへ、婦子に便し、上は以て車馬を通ず可くして下は以て舟楫を行く可き者に非ず。板橋の勢は、畧ぼ計るに四有り。平板橋は、杏花楊柳に宜し。蜂腰板橋は山河近岸に宜し。駝峯板橋は、宜しく江に近き支港に宜し。水は小なりと雖も、實に舟を行く可き者なり。(註解百十一頁參照)

曲板橋は、廻波曲水に宜し。勢に因りて石に倚る。(曲りたる板橋は、曲りたる波に書くに適して居る。勢に因つて石に倚りそうて居る。)

齒缺板橋は、古鎮の荒塘・寒村の積雪に宜し。(齒の缺けたる如くくづれかけたる板橋は、古い城あとの荒れたる塘や寒しい村の積りたる雪の景色の中に書くに適して居る。)

曲板橋宜於廻波
曲水因勢倚石



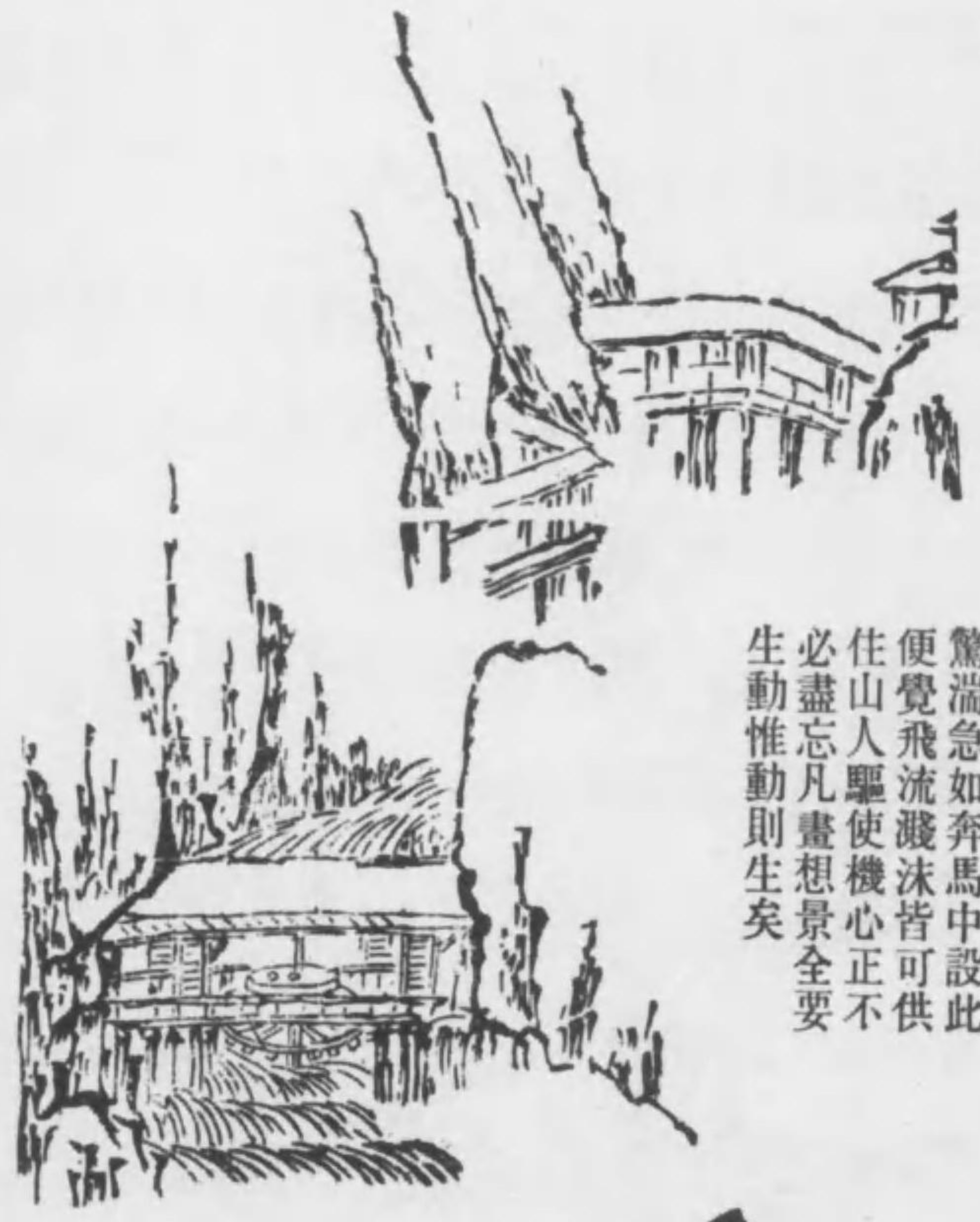
齒缺板橋宜於古鎮
荒塘寒村積雪



水磨の畫法
勢湍急にして奔馬の如き中に此れを設く。便ち飛流濺沫、皆、山に住する人の驅使に供す可く、機心正に必ずしも盡く忘れざるを覺ゆ。凡そ想像を盡くに、全く生動するを要す。惟だ動けば則ち生く。(註解百十二頁参照)

亭、水車を覆ふ式。(亭に覆はれたる水車を畫く法式)

水磨畫法
驚湍急如奔馬中設此
便覺飛流濺沫皆可供
住山人驅使機心正不
必盡忘凡畫想景全要
生動惟動則生矣



亭覆水車式

井亭式
宜畫於道
傍樹下以
待遊人憩
息



枯棹畫法秧針
綠滿杏酪紅深
携老挈幼連袂
而攀龍骨車歌
聲輟而復起東
作佳境實無踰
此



井亭の式。宜しく道傍の樹下に畫きて以て遊人の憩息を待つべし。(註解百十二頁參照)

枯棹の畫法。秧針は綠滿ち、杏酪は紅深く、老を携へ幼を挈ぎ、袂を連れて龍骨車に攀ぢ、歌聲輟みて復た起る。東作の佳境、實に此れに踰ゆる無し。(註解百十二頁參照)

欲收遠景須築
層樓欲收層崖
疊嶂千丘萬壑
非復尋常之遠
景必須高塔使
人望之而有手
捫星辰氣吞河
岳之槃所謂山
勢不全將以人
力補之是也劉
松年輒喜爲之

辟支石塔式



琉璃八寶塔式



廢塔式



遠景を收めんと欲せば、須く層樓を築くべし。層崖疊嶂千丘萬壑を收めんと欲せば、復た尋常の遠景に非ず、必ず高塔を須ひ、人をして之を望んで、手、星辰を捫で、氣、河岳を吞むの概有らしむ。謂はゆる山勢、全からざれば、將に人力を以て之を補はんとす。是れなり。劉松年輒ち喜んで之を爲す。(註解百十二頁參照)

辟支石塔の式。(辟支は辟支佛で、譯して覺覺又は獨覺といふのであるが、ここには阿羅漢の意味に用ひて居る。羅漢を供養する石塔である。)

琉璃八寶塔の式(琉璃を以て莊嚴したる佛塔を畫く法式。八寶塔は八つの大寶塔の意にて、八大靈塔とも云へども、ここはただ精工なる佛塔の意に用ひてある。八大靈塔即ち八大寶塔は何處に在ったか等の事は説明するを要せぬであらう。)

廢塔(壞廢したる塔)の式。

塔鈴、月に語り、寺鐘、霜に
吼ゆ。萬籟俱に寂たる中に於
て、此清冷の聲有り、空林古運
に响く。其間に點綴すれば、人
をして世外の想を生ぜしむ。
(註解百十三頁參照)

遠塔の式。(遠距離に在る塔
を畫く法式)

鐘樓の式。(鐘撞き堂を畫く
法式)

寺門の式

柵欄寺門の式。(木を以て作
つた垣ある寺院の門を畫く
法式)

遠塔式



鐘樓式



寺門式



柵欄寺門式



塔鈴語月寺鐘吼霜於
萬籟俱寂中有此清冷
聲响空林古運點綴其
間使人生世外想

樓閣を畫く諸法

畫中の、樓閣有るは、猶ほ字
中の、九成宮・麻姑壇の精楷
有るがごときなり。筆調に意
識なる者は、未だ嘗て柵欄
として、第だ層層として此れ
を事とせず、果して此れを事
とせば、則ち必ず古人に皮越
せんと以爲はずんばあらず。
其の筆を操るに及びては、十
指先づ已に頓結し、終日、點
墨を落すこと能はず。故に古
人の中、即ち放蕩なること郭
恕先の如きは、盈丈の卷を以
て、僅に其一灑墨を得れば、
屋木數角を亂作す。後に法則
無しと謂ふ可し。一旦にして
短尺を操り、黍粒を疊れて臺
閣を成せば、則ち空構楹楹よ
り、以て翠墨に染るまで、霞
のごとく舒び風のごとく動き
毫髪も數ふ可きにあらざる無
く、層層折折として、身を以
て其境に入る可きなり。絶え
て今人の及ぶ可きの功に非
ず。乃ち知る、古人は必ず小
心に由りて放蕩なることを。
未だ放蕩にして而も小心なら

畫樓閣諸法

畫中之有樓閣猶字中之有九成宮
麻姑壇之精楷也筆偏意縱者未嘗
不栩栩以爲第不層層事此果事此
則必度越古人及其操筆而十指先
已頓結終日不能落點墨故古人
中即放蕩如郭恕先以盈丈之卷
僅得其一灑墨亂作屋木數角可
謂漫無法則矣一旦而操短尺崇
黍粒而成臺閣則空構楹楹以
訖罕思無不霞舒風動毫髮可
數層層折折可以身入其境也
絕非今人可及之功乃知古人
必由小心而放胆未有放胆
而不小心者豈可以界劃竟
曰匠氣置而不講哉夫界劃
猶禪門之戒律也學佛者必
由戒律進步則終身不走
滾否則涉野狐界劃洵畫
家之玉律學者之入門

平臺崇樓式



ざる者有らず。豈に界割を以て竟に匠氣と曰つて、置いて譲ぜざる可けんや。夫れ界割は猶ほ禪門の戒律のごときなり。佛を學ぶ者、必ず戒律に由りて歩を進むれば、則ち終身、走流せず。否、されば則ち野狐に涉る。界割は洵に貴家の玉律、學者の入門なり。(註解百十三頁參照)

平臺(平かなる臺)崇樓(高き樓閣)の式

起挑せる飛翬(はねあがりたる鳥の飾り)あり四面皆正しき臺閣の式
遠殿(遠き宮殿)の式

重軒列陸の殿(軒かさなり、かさばし列なりたる宮殿)の式

起挑飛翬四面皆正臺閣式



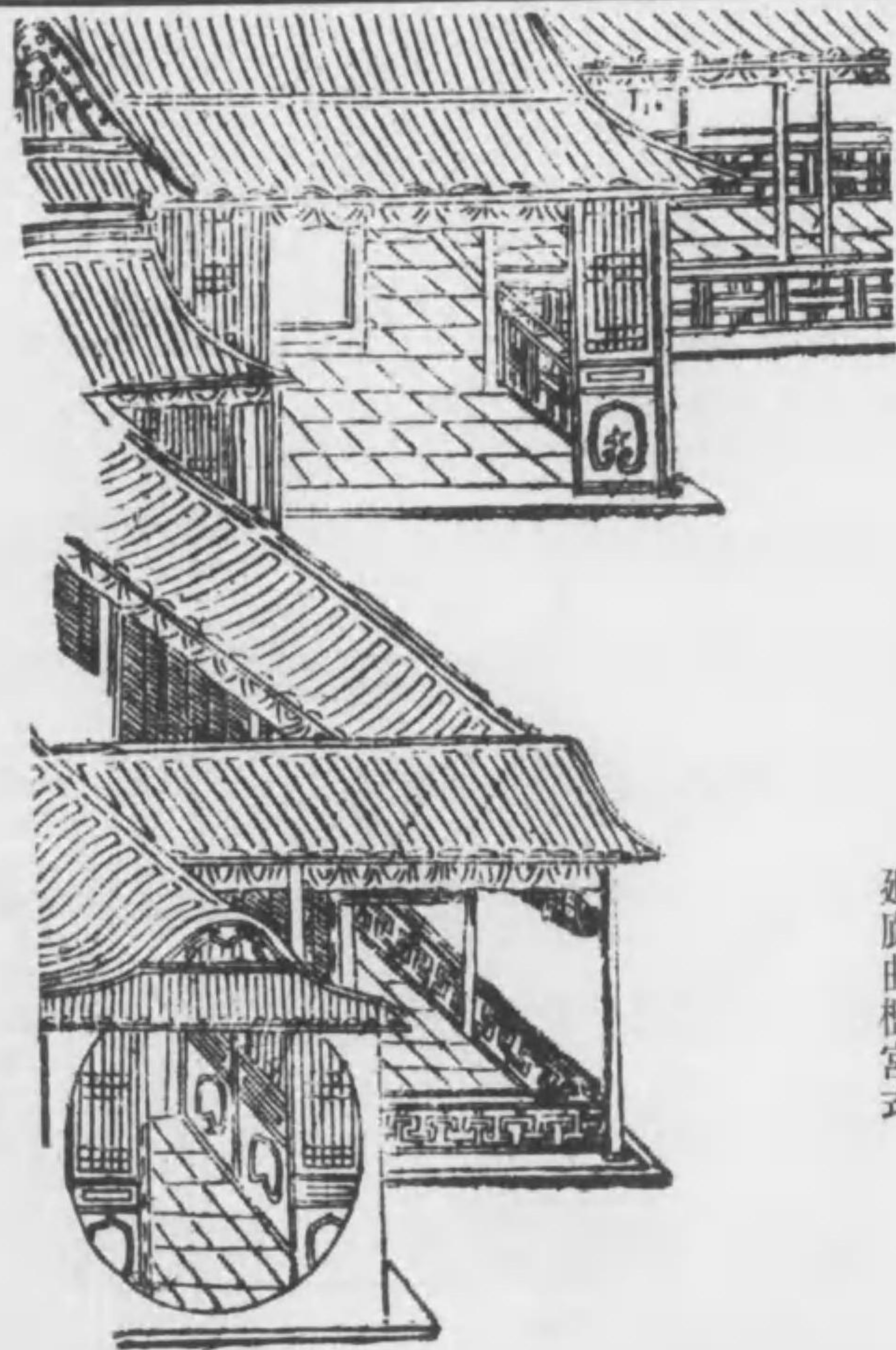
遠殿式



重軒列陸殿式



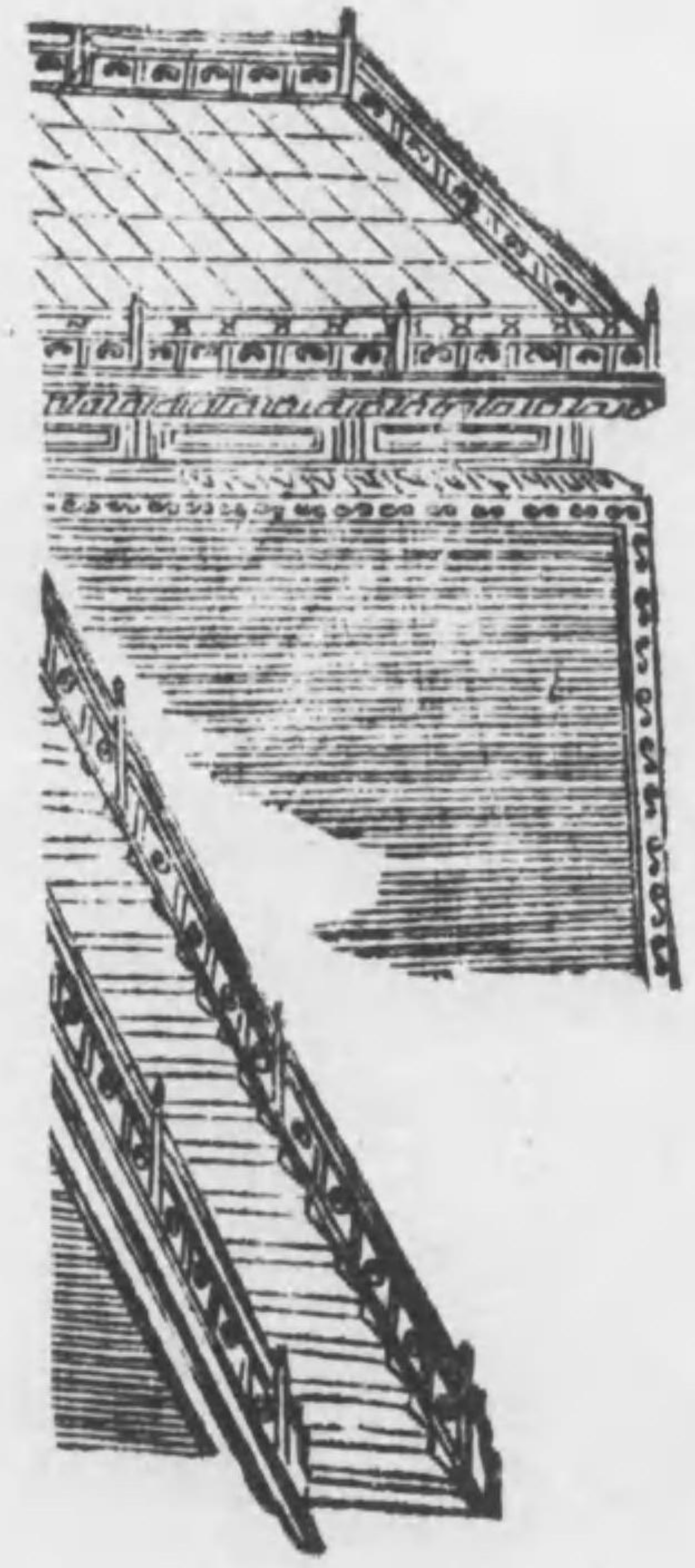
廻廊曲檻(まはりたる廊下、曲りたるらんかん)の宮の式



廻廊曲檻宮式

平臺(平かなる臺)の式

平臺式



遠亭(遠く見ゆる亭)の式

遠亭式



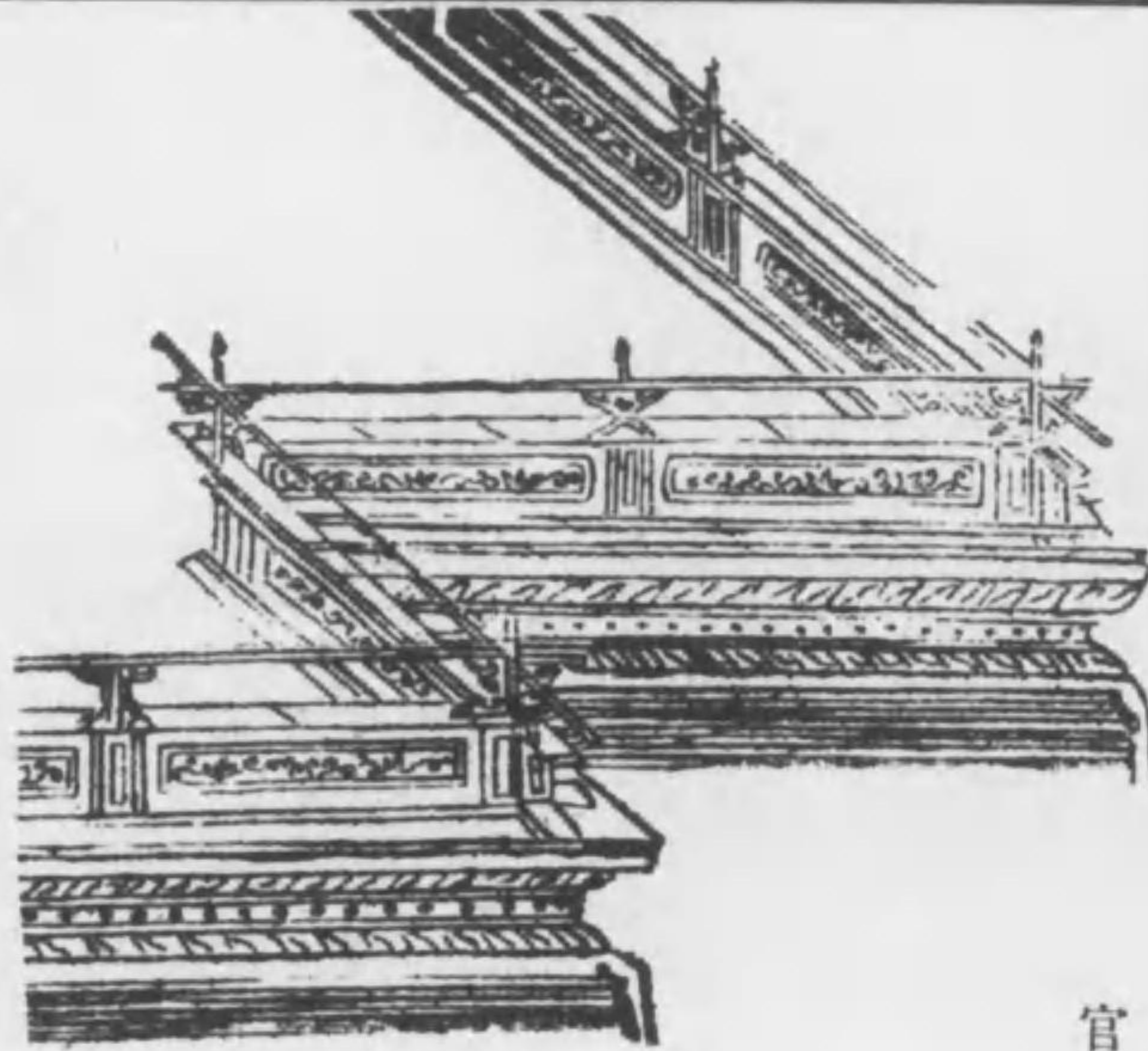
九曲十八面の亭の式



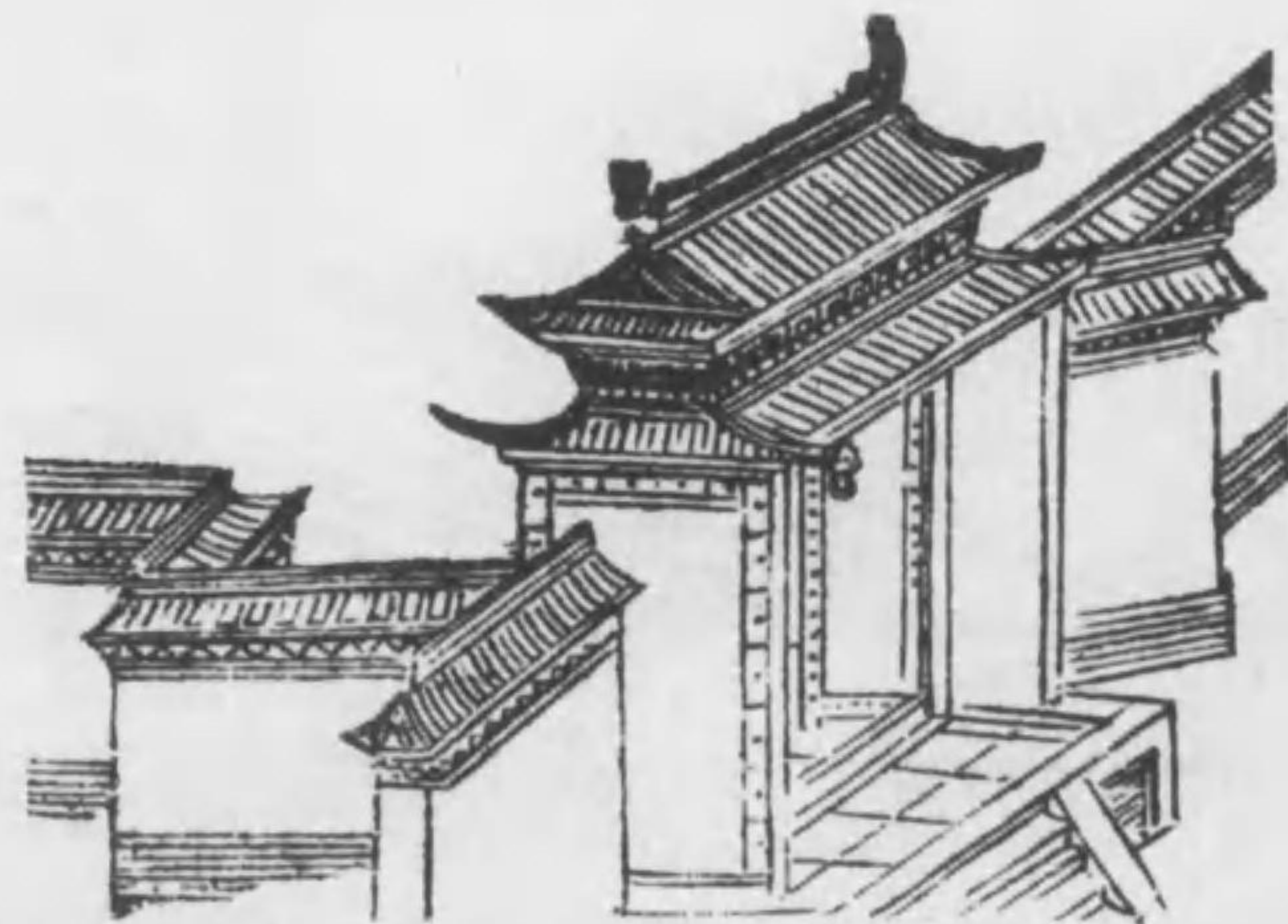
九曲十八面亭式

雕欄玉樹 (彫刻したる手す
 りうつくしき物見)の式
 官府(やくしよ)の門第の式

雕欄玉樹式

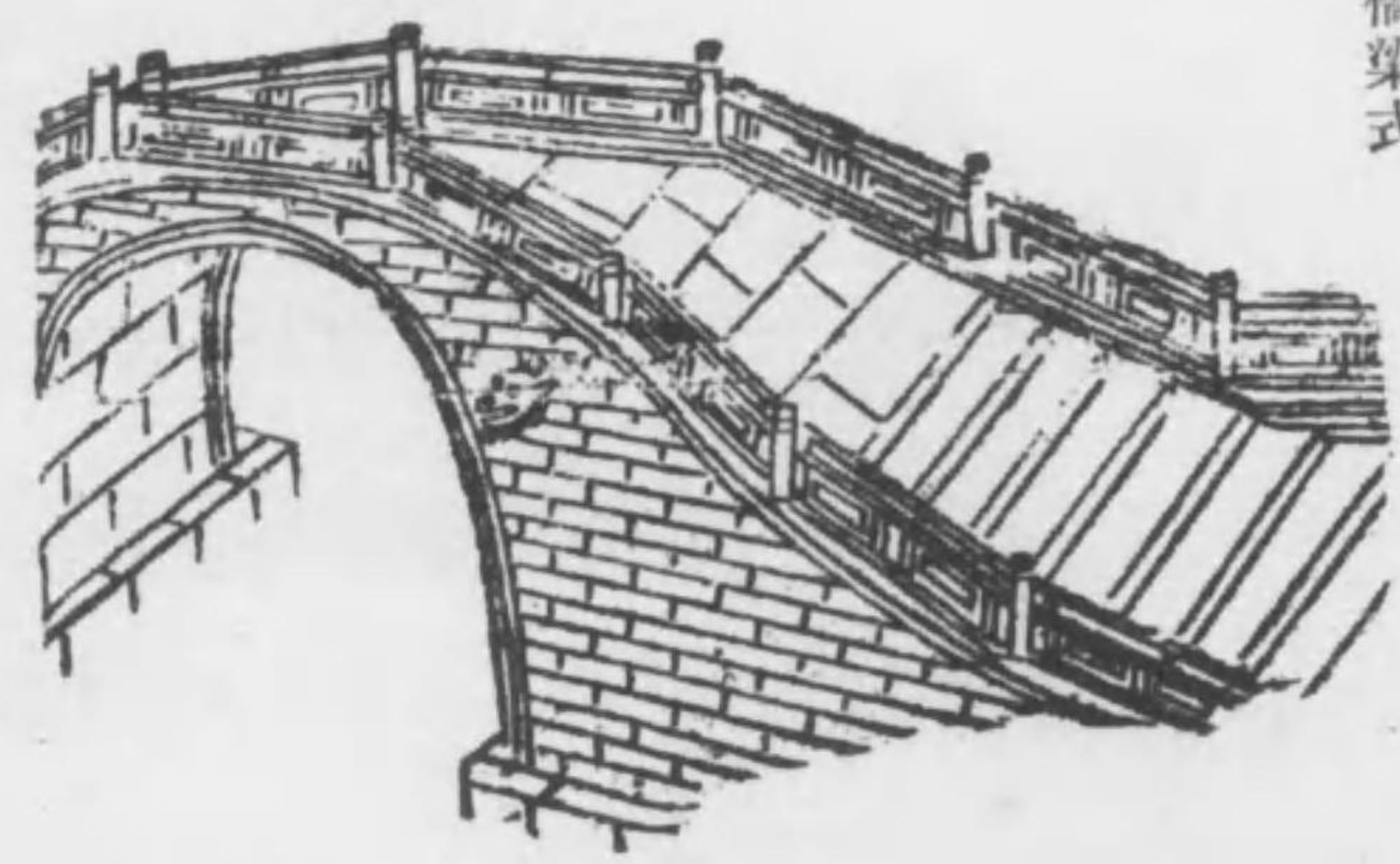


官府門第式

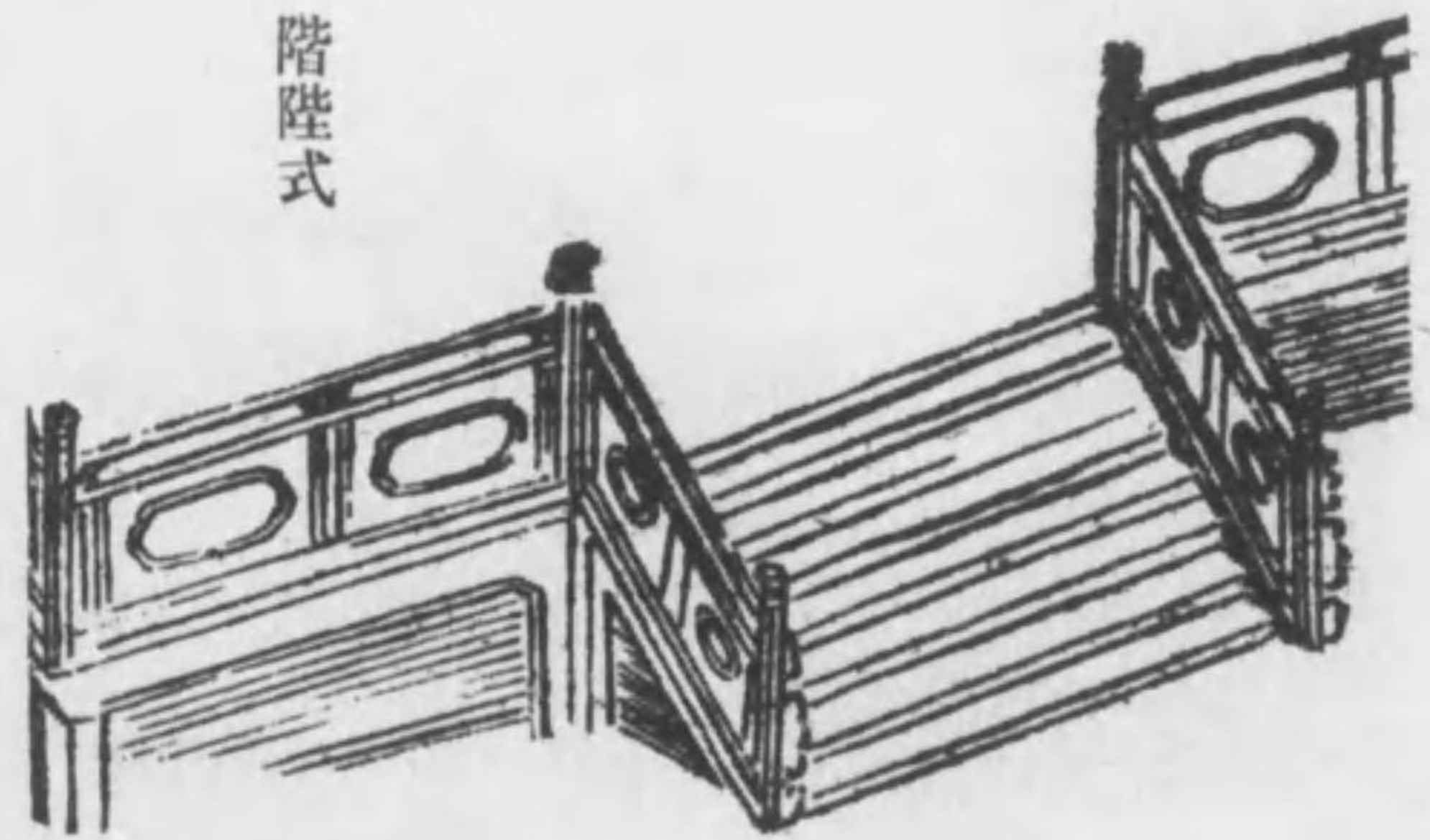


工細なる橋梁（工緻精細なる橋）の式
階陸（きざはし）の式

工細橋梁式

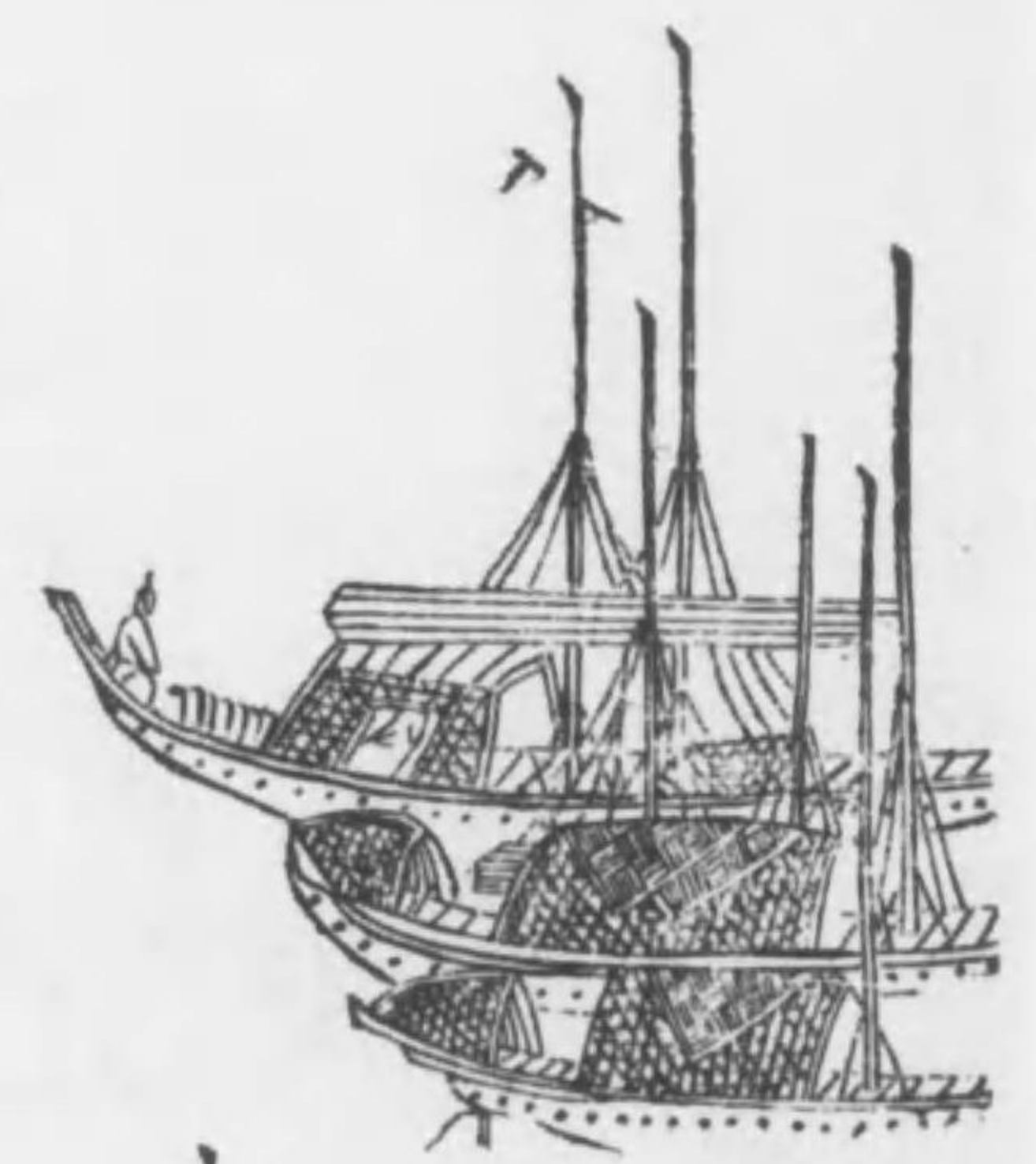


階陸式



泊船。（とまりぶね）
渡船。（わたしぶね）
開貼（出帆せんとすること）

泊船



渡船



開貼



雙帆齊掛船。(ならび行く二艘の帆かけぶね)
 雨景の漁艇。(魚を取る舟)
 酒を載する船。(遊び舟)

雙帆齊掛船



雨景漁艇



載酒船



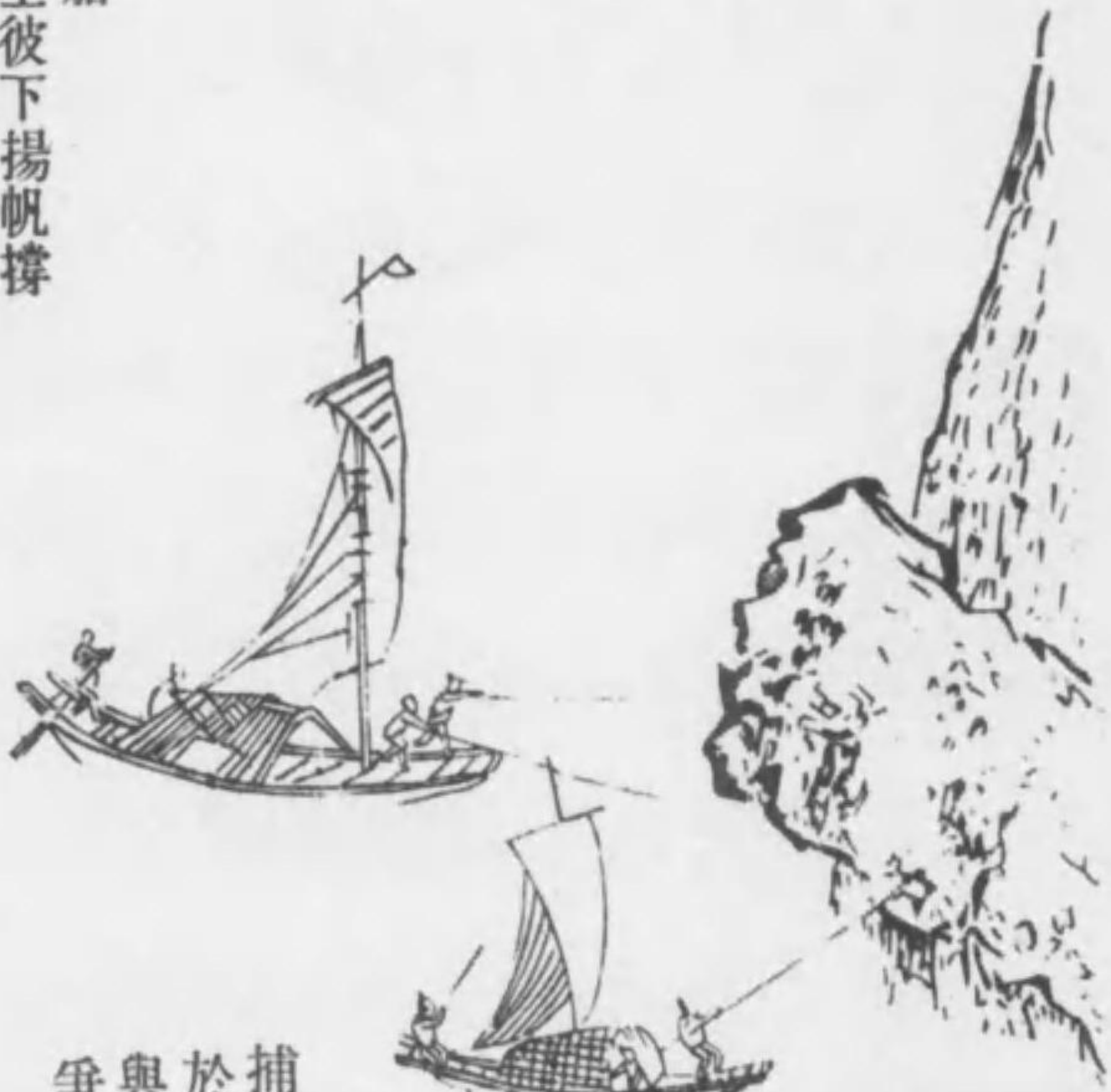
江船

此れは上り彼れは下り、帆を揚げ流を操へ、各々氣力を用ふ。以て長江に上下の風有るを見はすなり。(此船は川上にのぼり、彼の船は川下に入り、一は帆を揚げ、一は篙をさし、各々力を盡して居る。長江に順風と逆風とあることを示すのである。)

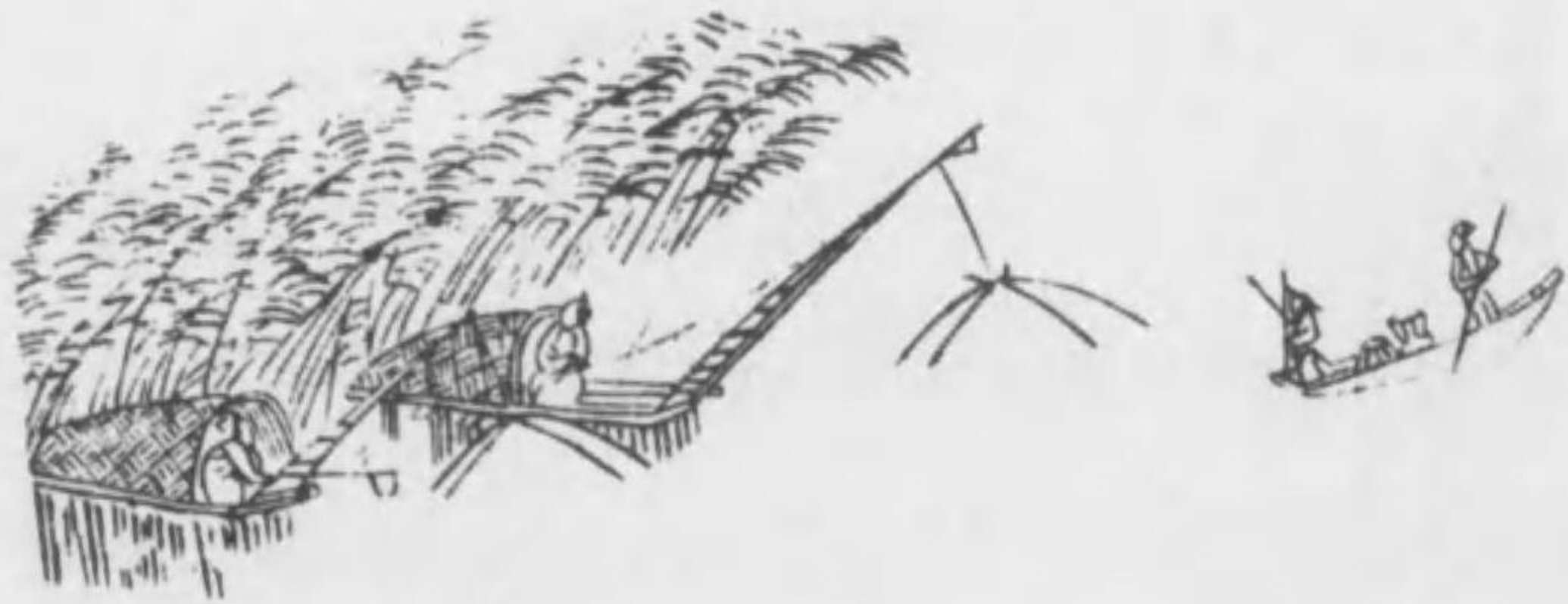
魚を捕る式

魚を捕る習は、平沙叢草に畫き、落雁宿鷗と、汀煙江月を争ふに宜し。(魚を捕る四つ手綱は、沙平かに葦茂りたる間に畫いて、落雁宿鷗と、汀の煙、長江の月の光景を争ふ趣あらしめるが宜し。)

江船
 此上彼下揚帆操
 篙各用氣力以見
 長江有上下風也



捕魚習宜畫
 於平沙叢草
 與落雁宿鷗
 争汀烟江月



大罾（大きい四つ手罾）

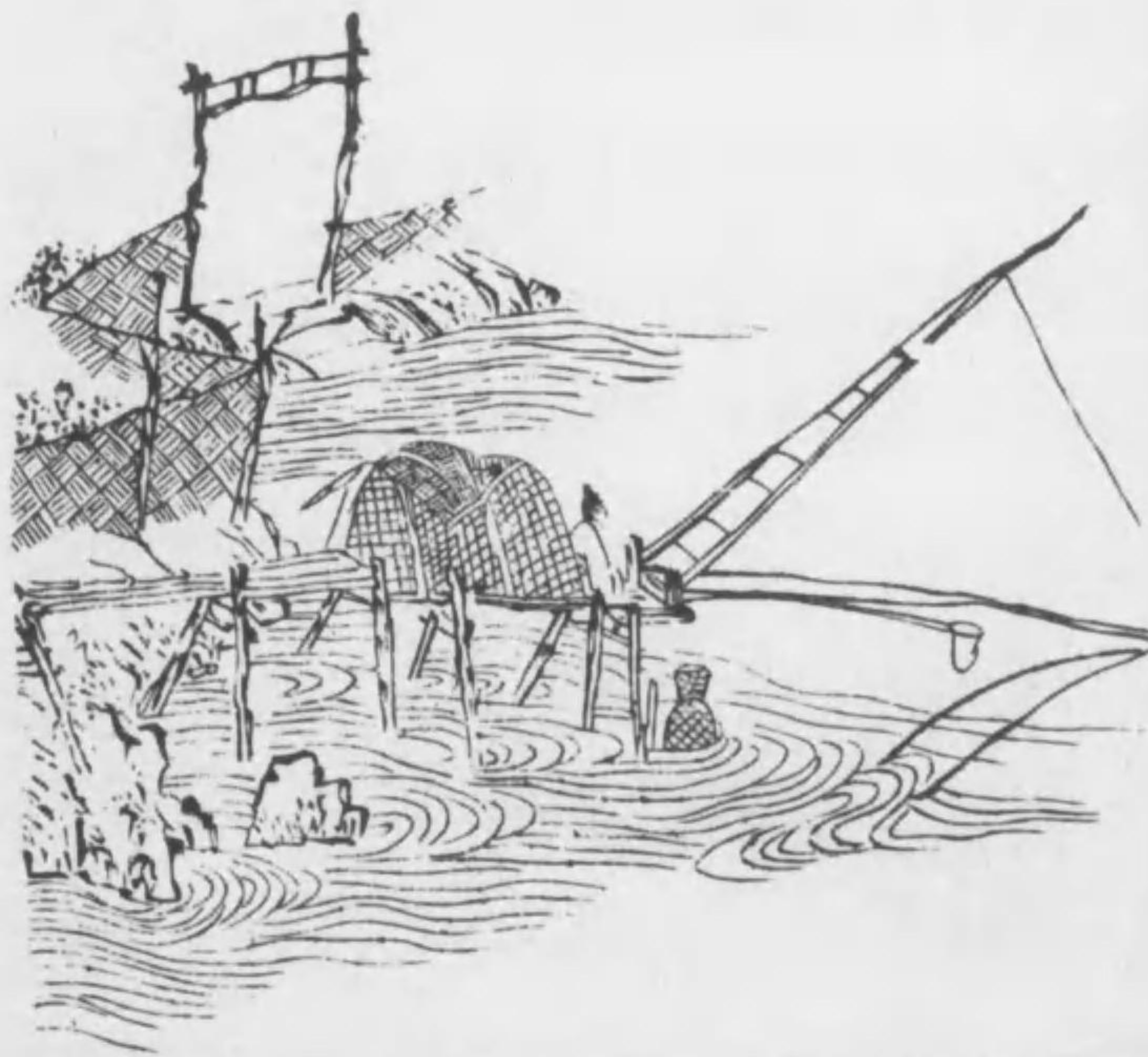
峽船

川景に畫くに宜し。三峽は百尺を以て例に奔瀾に挽く。斷じて吳越の平波の間に畫く可からず。（註解百十五頁參照）



峽船
宜畫於川景三峽
以百尺倒挽奔瀾
斷不可畫於吳越
平波間

大罾

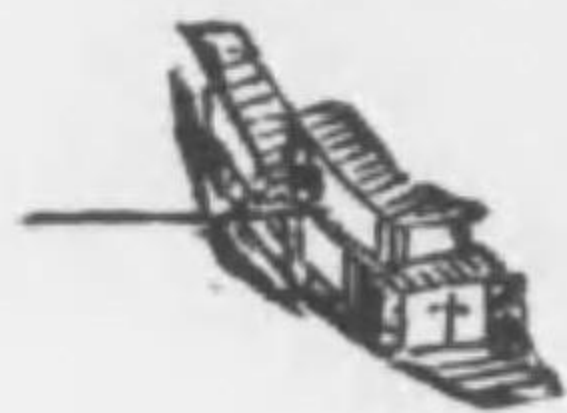


湖船の式
波光、練の如く、湖波未だ起らざる時、酒を載せ詩を吟ねるに宜し。（註解百十五頁參照）

櫓船

月下及び霞の中（註解百十五頁參照）に宜し。人をして之を見て歎乃を聞くが如くならしむ。（註解百十五頁參照）

湖船式
宜于波光如練湖
波未起時載酒尋
詩

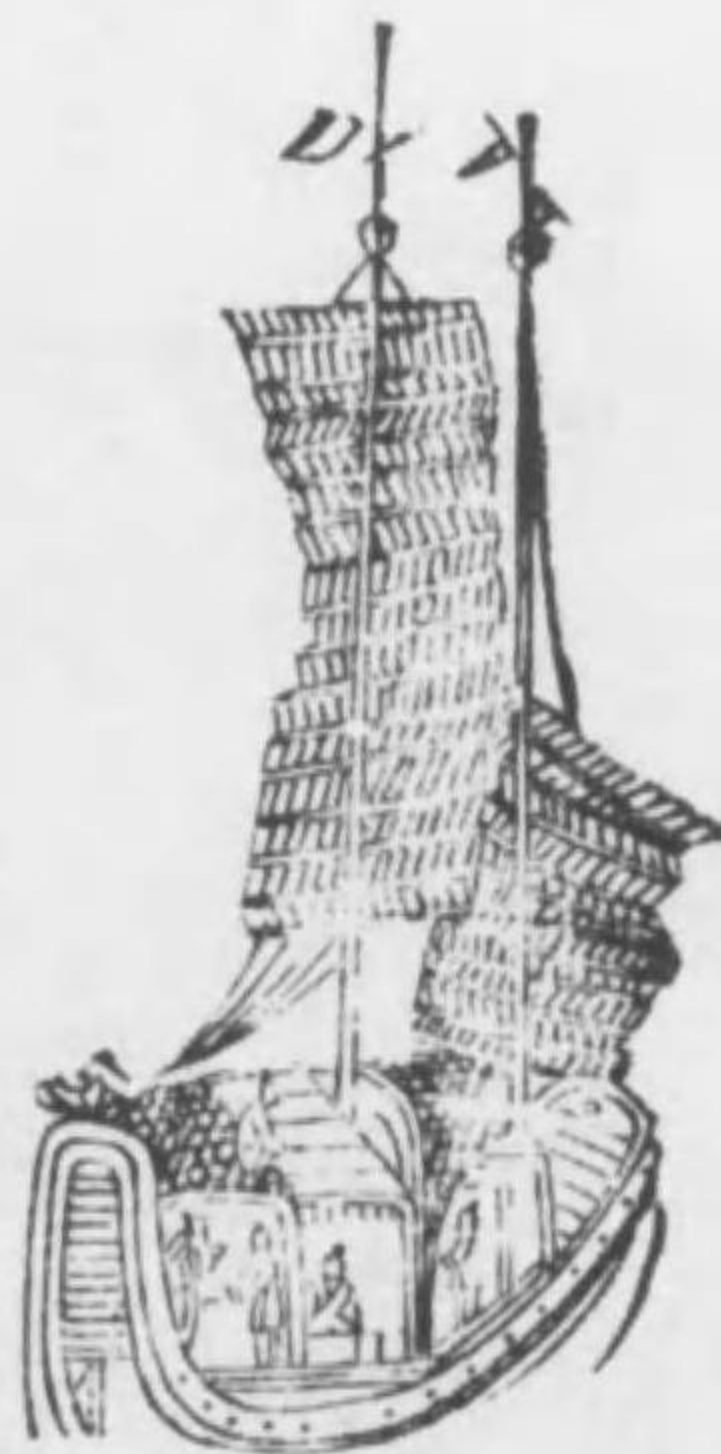
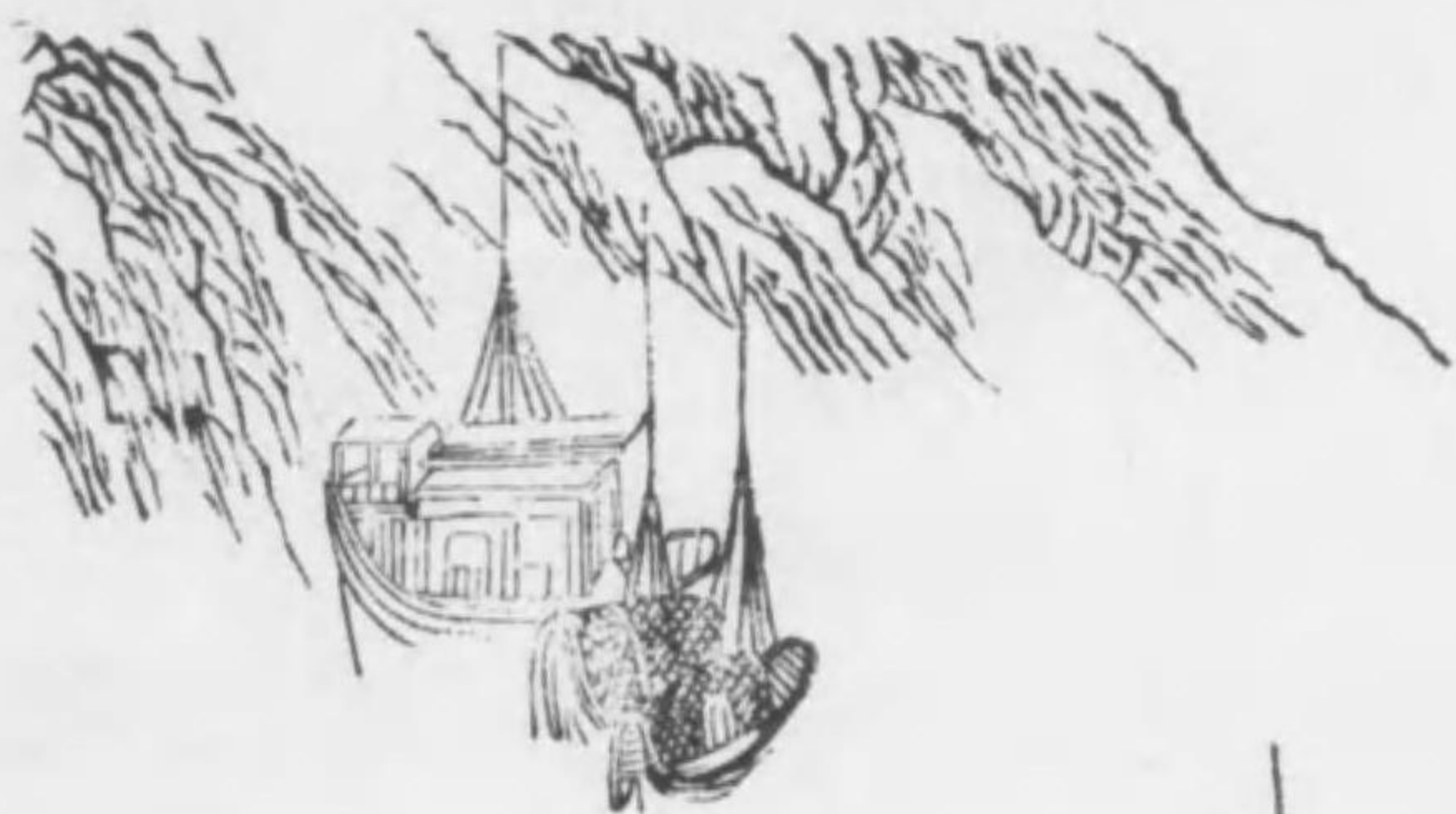


櫓船
宜於月下及霞
中使人見之如聞
歎乃



巨艦

江海の波濤の中に宜し。帆を揚げて浪を破り、頃刻千里の勢有り。(巨艦は大船である。これは大江・大海の大波の中に畫くに宜しい。帆を揚げて浪を破つて進み、暫時の間に千里を行くが如き勢がある。)



巨艦
宜於江海波濤中揚帆
破浪有頃刻千里之勢

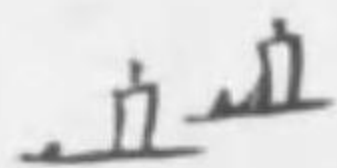
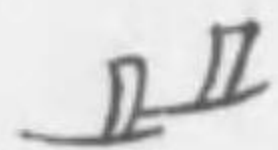
大小の風帆、遠近擇び用ふ。

(風をはらんで居る大きい帆船と小さい帆船。遠い者や近い者の場合に応じて擇んで用ひる。)

網を撒する船。(網を打つ船)

客を渡す船。(わたしぶれ)

大小風帆遠近擇用

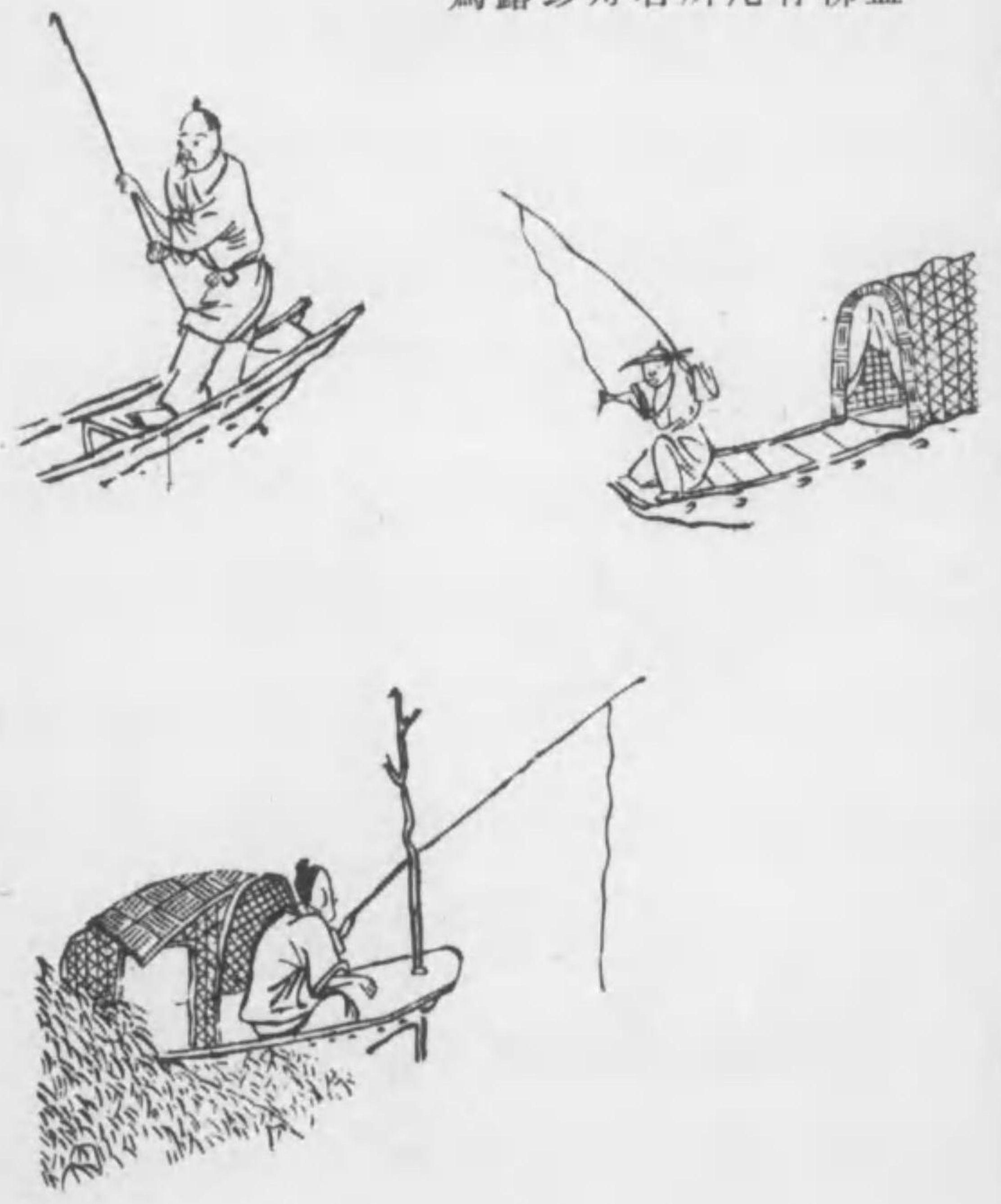


撒網船

渡客船

竿を持ち楫を撃つは、必ずしも、全身を露はさず、蘆中柳下に於て、一たび點綴を爲せば、自ら神龍の首を見はして尾を見はさざるの妙有り。然れども亦、須く畫く所の地方を見るべし。地方若し促るに、全然横さまに一舟を置し、上下塞滿せば、何の妙處か有らん。故に只だ宜しく首を露はし尾を露はすべし。有餘不盡を妙と爲すなり。(註解百十五頁參照)

持竿擊楫不必盡露全身于蘆中柳下一爲點綴自有神龍見首不見尾之妙然亦須看所畫之地方地方若促全然橫互一舟上下塞滿有何妙處故只宜露首露尾有餘不盡之爲妙也

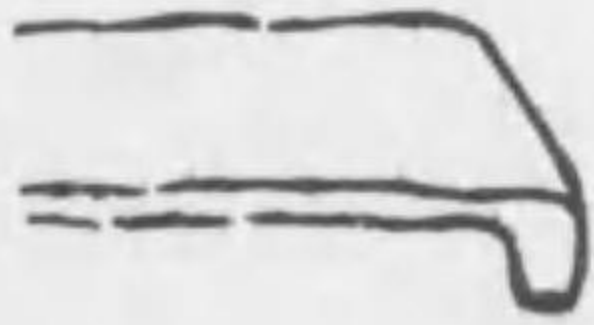
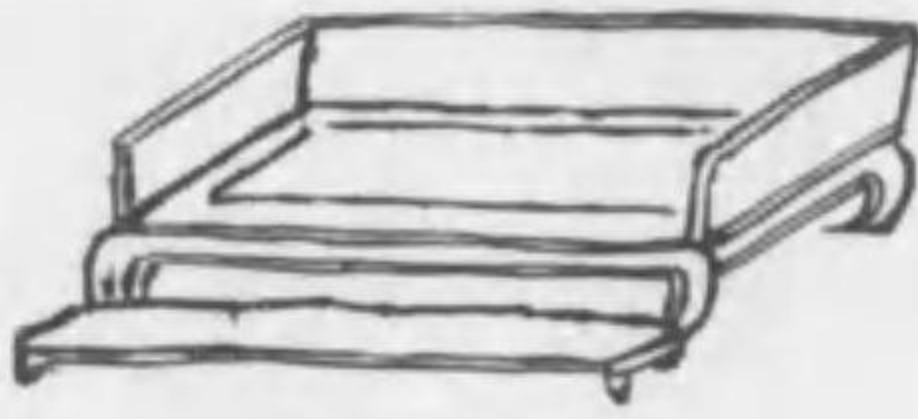


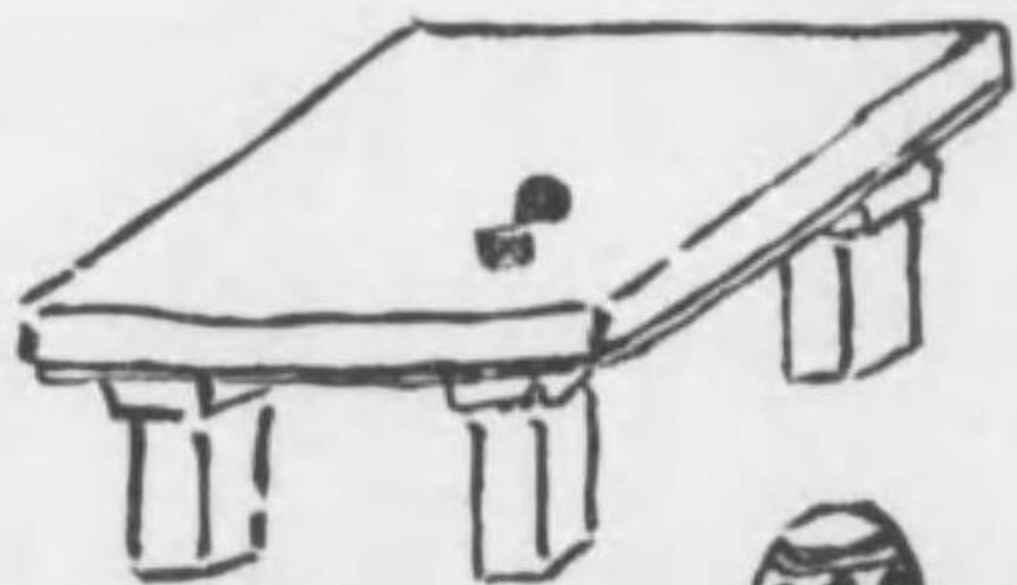
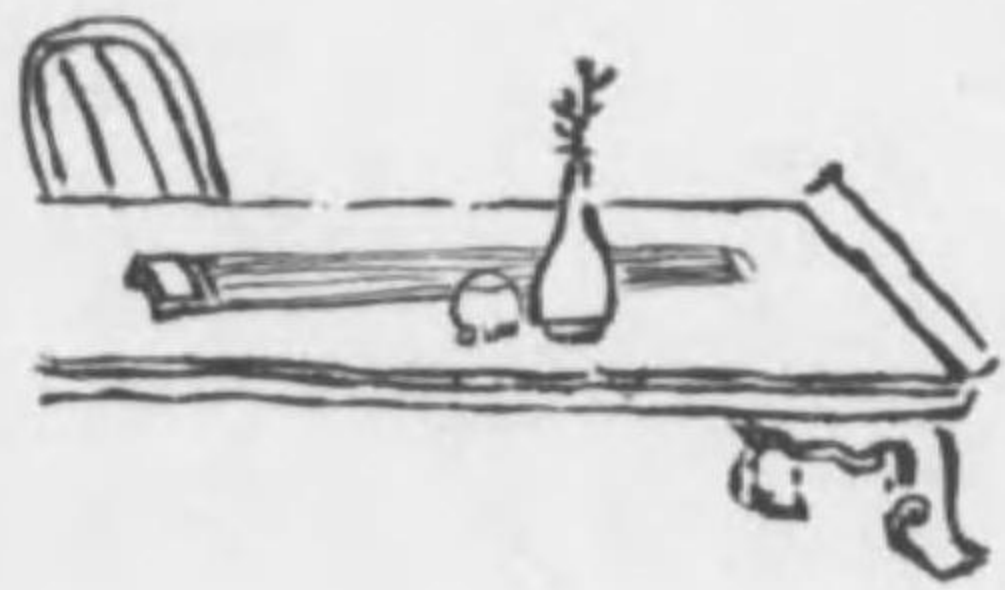
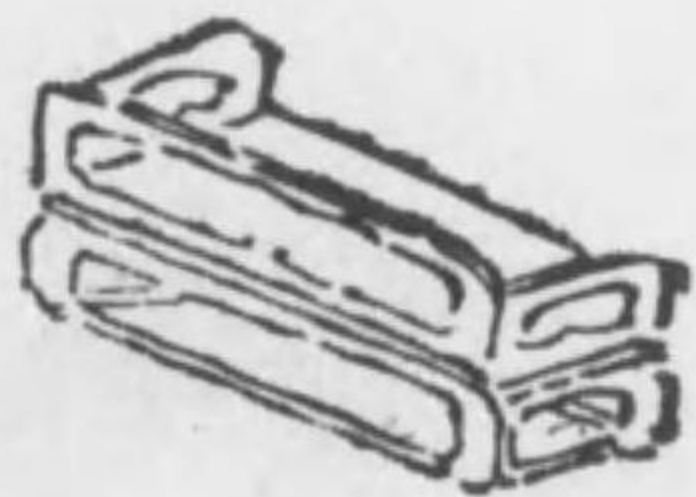
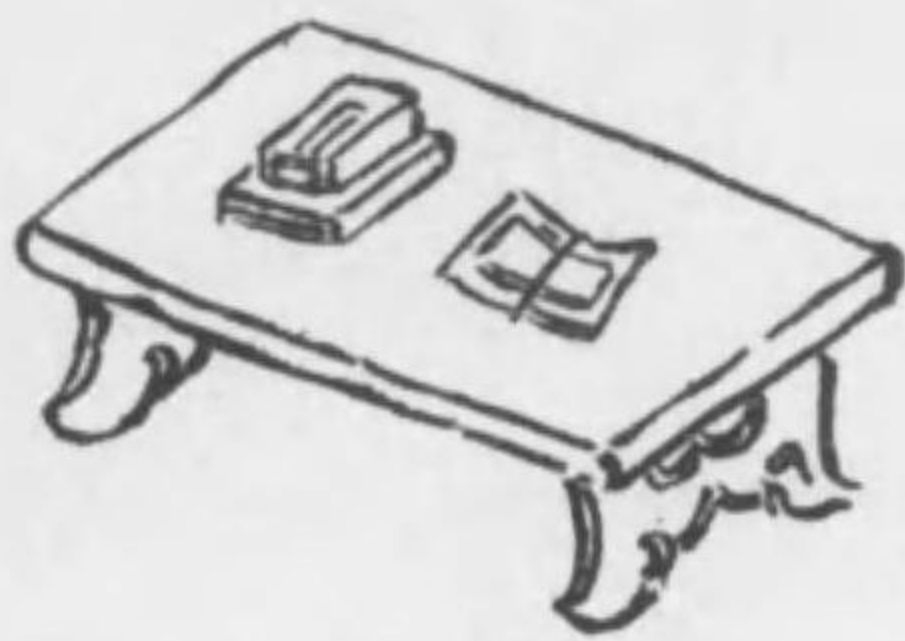
几席屏榻の諸法

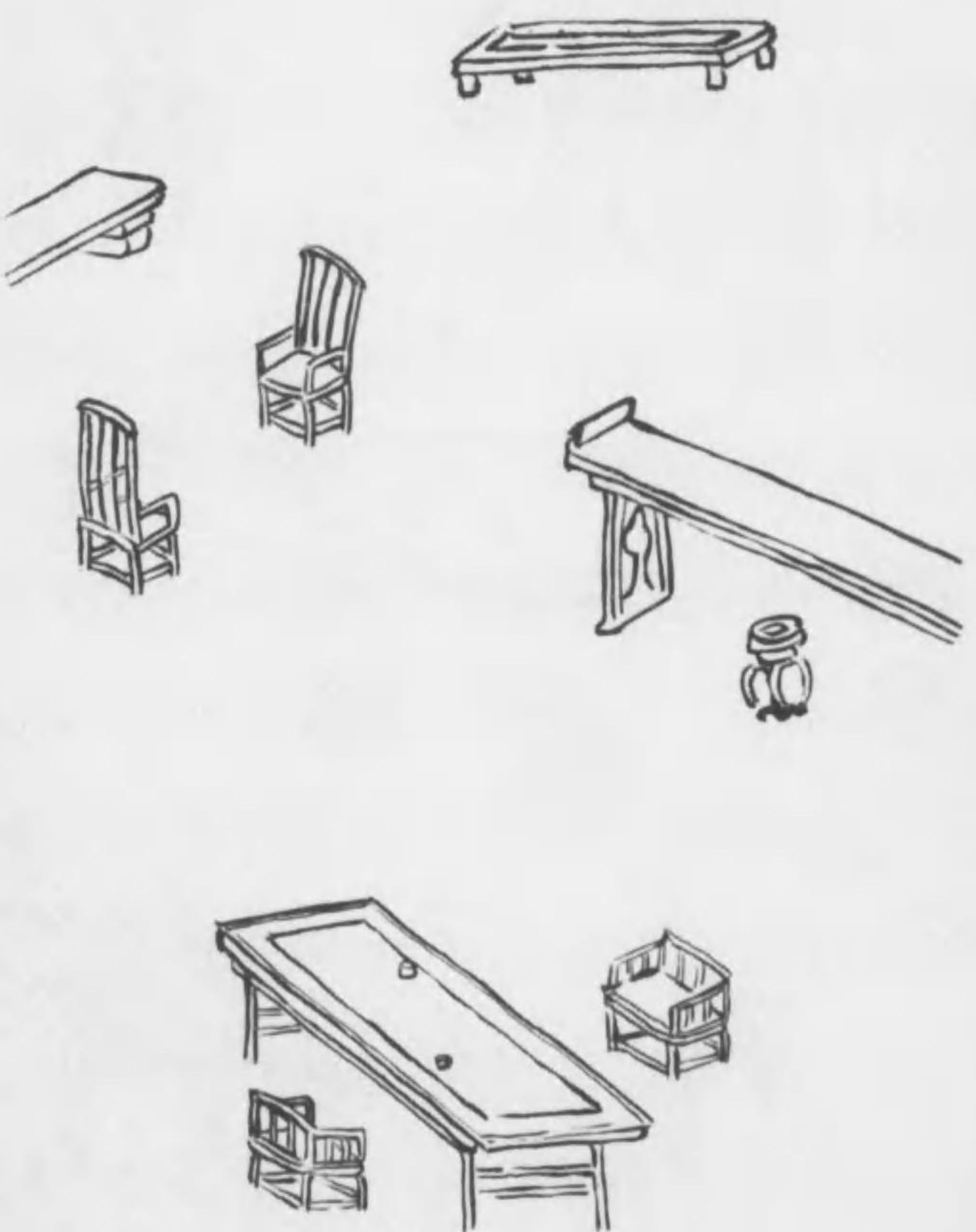
既に亭榭を畫く、安んぞ之をして空洞にして物無からしむるを得ん。必ず几席の懸る可く、蕙く可きを須ふ。此等の物を畫くには、固より太だ工なる可からず。工なれば則ち俗なり。亦、太だ法無かる可からず。法無ければ則ち素。山水絶だ佳に居停頗る雅なる有るも、而も其中の一、二の服御、殊に相稱はざれば、未だ白壁の微瑕を免れざるなり。太凡、屋左折すれば則ち几榻も亦宜しく左折すべし。屋右折すれば、几榻も亦宜しく右折すべし。側面を以て側面に合す。大にして盈尺、小にして分許なる、其法皆然り。(註解百十六頁參照)

几席屏榻諸式

既畫亭榭安得使之空洞無物必須几席可憑可藉畫此等物固不可太土工則俗亦不可太無法無法則素儘有山水絶佳居停頗雅而其中一二服御殊不相稱未免白壁微瑕 大凡屋左折則几榻亦宜左折屋右折几榻亦宜右折以側面合側面大而盈尺小而分許其法皆然







註解

(題下の数字は本欄頁數を示す)

○ (三)

山水畫の中の點景人物(あしらひに書き入れる人物)のいろ／＼な書き方は、餘りに念入りに書いてはならぬ、又あまりに勢が無いやうであつてはならぬ、山水と見合つて居るやうであることを要する。人は山を見て居るやうであり、山も俯いて人を看て居るやうである。琴は月に聽かせるやうであり、月も靜に琴を聽いて居るやうである。斯くすれば、畫を観る者は、畫の中に躍り入つて畫の中の人物と席を同じくすることを得ぬことを恨むであらう。然うでなければ、山は山、人は人と、全く別の物になつてしまふ。それよりは寧ろ倪雲林(幻設は雲林の別號)の畫の如く空山にして人の無い方がまさつて居る。山中畫の中の人物は、清癯として鶴の如く、遠くから

見れば仙人の如くであることを要する。少しも世俗の卑しい氣分があつてはならぬ。若し少しでも世俗の卑しい氣分が雜つて居るときは、山水の瑕となるであらう。今、ここに行いたり立つたり、坐つたり臥たり、觀たり聽いたり、人の侍従となつたりする諸の法式の中で、略ぼ一二を擧げ、并せてそれ／＼唐宋の詩句を上題して、山水畫の中の人物はちやうど文を作るに於ての點題の如き者であることを示すのである。一幅の畫題や識は、全くこの點景人物の情態によつて書かれるのである。古人の畫には、おほむね其れに就いての題詠の詩がある。けれども此處に題して居る詩句は、何の式には必ず何の句を寫すのであると拘泥してはならぬ。此處に載せてあるのは、偶々一例を示したのであつて、學者が類に隨つて外に及ぼして應用することを待つに過ぎないのである。

樓寫意の人物の式(四三)

ここに載せてある數個の法式は、尤も寫意の中の寫意である。筆づかひが、最も、生動飛舞してびち／＼と働いて居ることを要する。たとへば書家の張旭が筆に任せて書きなぐつた草書のやうでありたいのである。(唐の張旭は、蘇州の人、字は伯高、草書を善くし、草聖の稱あり。酒を嗜み、大醉する毎に、呼叫して狂走し、乃ち筆を下す。或は頭を以て墨に濡ほして書す。世呼んで張顛と爲す。)けれども草書は楷書にくらべるとむづかしい。それ故に古人は、忙がしいので、草書を書く暇が無い、と曰つて居る。

(漢の張芝は、筆を下すに必ず楷書にして、則ち曰はく、匆匆として、草書に暇あらずと。)それと同じく草書は眞畫にくらべると大層六かしいのである。それ故に寫と曰ひ、又必ず意の字を添へるのは、意無くしてむやみに筆を下してはならぬことを示すのである。必ず、目は無いけれども視るが如く、耳は無いけれども聴くが若く、一筆二筆の間に、筆外の意が現はれることを要する。繁多なるを削りて簡潔

暮の畫になる。雨が降らうとするときには、鶴が鳴き、雪が降らうとするときには、鴉が羣がりさわぐ。牛馬は順風か逆風かを知るといふことである。此類がいろ／＼ある。畫面が生き／＼と働くのは、全く此點に在る。

穿挿して屋を畫く法 (五七)

すべて山水畫の中に家屋が有るのは、ちやうど人に眉や目が有るやうなものである。人に眉や目が無いときは、盲人や癩病患者である。けれども、眉や目は美しくしても、その置き所が宜しきを得なければならぬ。眉や目は無くてはならぬが、多くしてはならぬ者である。若し通身皆眼である人が有つたならば、それは一つの怪物である。若し家屋を畫くに、其地勢と組み合はせの前向後向とを審かにすることを知らず、むやみに幾重にも積み重ねたならば、これに異ならぬのである。吾は故に謂ふ、凡て家屋を畫く法は、必ず山水の面目の在る所を詳かに吟味す

にし、そして至極の簡潔に至ると、自然の趣がありありと現はれて、まことに數十百筆でも寫し出すことの出来ない者が有るであらう。そして此一筆二筆を忽然として悟入するときは、始めて妙に入つたものである。

山水の中の鳥獸の各式 (四九)

此種類は小さい事であるけれども、關係するところは甚だ大きい。若し春を畫かうとするならば、春の畫は、唯だ鳴いて居る鳩や巢ごもりの燕を畫くだけで、それで春の畫になる。若し秋を畫かうとするならば、秋の畫は、唯だ飛んで居る鴻や宿つて居る雁を畫くだけで、秋の畫になる。けれども春と秋とは、山の樹に於てでも、區別することが出来る。曉を畫かうとするときは、曉の畫は、唯だ棲鳥が林を出て犬が吠えて門戸を守つて居るところを畫くだけで、曉の畫になる。暮を畫かうとするならば、唯だ雞が啼くとまり、鳥が樹に藏れるところを畫くだけで、

べきである。天然に自然に家屋を置くべき場所がある。大なるは數丈の畫、小なるは一寸ばかりの紙でも、其れに人の住居を置くには、只だ一箇處か二箇處かの適當な位置が有るだけである。山水畫に人の住居が有るときは、情味を生ずる。けれども人の住居をごた／＼と亂雜に書き入れるときは、まるで世間の卑俗の氣分になつてしまふ。近頃の畫の中で、家屋を書き入れて適當なる位置に落ちついて居る者は、僅に數人有るだけである。この數人の外は、山水は工であるけれども、其の畫くところの人家は、螺螄精のやうな者である。さうでなければ、小兒が戯に土を累ねて居るやうなものである。まるでめちや／＼の構圖である。先年、姚簡叔が作つた畫には、黍の粒ほどの大きさの一二間の小さい家でも、必ず前と後とが相通じ、曲折して致を盡して居り、山は家を顧み、家は山を顧みるの妙味がある。善く古を學んだ者と謂ふべきである。(明の姚允在は、字は簡叔、會稽の人。萬曆の間、山水は荆關を學び、

筆墨遒勁にして、思致、凡ならず。人物精工秀麗にして、能品と妙品との間に在り。

謂はゆる眉目といふは、門戸は眉であり、堂奥（奥座敷）は目である。眉は長いが宜しい。それ故に牆はうね／＼と曲つて取り巻いて居るが宜しい。目は露はれ過ぎて居るのは宜しくない。それ故に内部に在る家屋は、引きしまつてふつくりして居るが宜しい。其法式は二種ある。上の法式は平地に用ふるが宜しい。下の法式は山に因つて積み重ねるべきである。此外はこれに倣つて知るべきである。

門運を畫く式（六七）

山中の隱者は、必ずしも其奥座敷に通つて後に始めて其の幽静閑寂なる趣を見ることが出来るのでは無い。門に入る運の間に於て望み見ただけで早く道德高さ人の處であることが知れて、人をして欽慕仰の想を起さしめるやうにすることを要する。此の如くにして始めて能手とすることが出来る。門運を畫

に劣らないのである。それ故に、樓臺の畫法の後に村野の小さい景色を載せて、畫を作るには淡泊なる處に多く著眼すべきことを示すのである。他人の眞似をしてはならぬ。一方に拘泥してはならぬ。凡そ天地の間のあらゆる物は、皆、我等が剪り取つて畫の中に入れることが出来るものである。

橋を畫く法（七九）

深き洞や險しき崖は、橋を以て氣分が接續するのであつて、橋は最も缺くことが出来ないものである。すべて橋の有る處は、人の通行したる跡が有るのであつて、荒蕪したる深山とは全く違つて居る。然れども橋を置くべき位置には、適當なると不適當なるとがある。橋の種類にはいろ／＼あつて、石が薄くて中程が高くなつて居る阜のやうなのは、吳（蘇州）浙（杭州）の橋である。橋の上に屋根を造り、重い石の柱を以て壓して、急流に押し流されないやうにして居るのは、閩粵（廣東）の橋である。更に危梁を陡く

くには、其中に住まつて居る人品に相當するやうにせねばならぬ。（三顧の字は、諸葛孔明の出師の表に、先帝、臣が卑鄙なるを以てせず、猥に自ら枉屈して、臣を草廬の中に三顧す、とあるに本づく。三顧は三たび訪問すること。）

○（六九）

柴の扉には藤蔓がからまり、石段は雜草に埋もれ、瓦はちぎれたる鱗のやうに處々缺けて居り、壁は龜の甲のやうに折が入つて居る。極めて荒れ果てたる中に、極めていき／＼と動いて居る氣分がある。これは唯だ王叔明の獨舞臺であり、他人は追隨することが出来ない。凡そ雨の景や雪の景を畫くには、之を用ひることが出来る。

郊野の小景の法（七三）

立派なる建築物は固より神仙を居らせる所である。けれども豆棚や瓜架の如き清眞なるところも、神仙

架けたのは、險しき壑に適當し、薄い石を横に架けわたしたのは、平かなる沙地に適當して居る。其他は類を以て推して知るべきである。

○（八一）

桑間の籬落や低い山地の平な田の間には、土地の人が随意に丸木橋を架けて、女子供の通行するに便利にして居るが、橋の上は車や馬を通行させることは出来ず、下は舟を通行させることは出来ない。板橋の形は、大略五種類ある。（杓は杓に作るを正しとす。）
平板橋（平かなる板橋）は杏の花や楊柳の間に書くに適して居る。

蜂腰板橋（蜂の腰の如く細く長く板橋）は、山の河の岸の近いところに書くに適して居る。
駝峯板橋（駝駝の背の如く中高き板橋）は、江に近い支港に書くに適して居る。川は小さくても、舟を通行させることが出来る者である。

水磨の畫法 (八三)

水磨は水車である。險しき流が馬の奔るが如く急なる中に、此れを畫くのである。さうすると、飛ぶが如き流・ほとばしる水も、皆、山に住まつて居る人たちの爲めに使役されるのであつて、山に住まつて居る人たちも、物事を工夫し機械を用ひる心がまだ全く無くなつてゐないことが現はれるのである。すべて意想の景色を畫くときは、全く生きて動くことを要する。惟だ動きさへすれば生きるのである。

井亭の式 (八四)

井亭は井の上を覆うたる亭である。これは道傍の樹の下に畫いて遊ぶ人たちの休息に供へるが宜しい。

桔槔の畫法 (八四)

桔槔は、はねつるべである。然るにここに畫かれたるは桔槔では無く、龍骨車である。題と畫と違つて

どの高樓を築くことを要する。若し幾重にも層なりたる崖、幾重にも疊なりたる嶺、多くの邱、多くの壑を收容しようとするならば、これは尋常の遠景では無いので、必ず高き塔を畫くことを要する。そして人をして之を望み見て、手は星辰まで届き、氣分は河や岳を呑む如き心持有らしめるやうにする。謂はゆる山の形勢が完全でないときは將に人の力を以て之を補はうとするといふのが、是れである。劉松年は常に喜んで此手段を用ひた。

廢塔の式 (八六)

塔の簷に懸けてある金鐘は明月の夜に鳴り、寺院の鐘は霜降る夜半にうなつて居る。あらゆる物音がすべて息んで静寂なる中に、この清らかなる聲が物さびしき林・荒れたる逕に響きわたつて居る。物さびしき林・荒れたる逕の間に、塔や鐘樓を書き入れるときは、人をして人世の外に在る想を起させる。

居るのは、何の故であるか分らぬ。桔槔も莊子天地篇には田圃を灌溉するに用ひられて居り、龍骨車も田圃を灌溉するに用ひられて居るので、不注意で誤つたのか。それとも、すべて機械を用ひて灌溉することを、南方の方言では桔槔といふのか。それにしても一般に通用しない言葉である。誤であるとしても善からう。秧針は稻の苗である。杏酪は杏である。龍骨車は水を汲み上げる車である。水車であるが、前水磨とは違ふ。東作は春の農業をいふ。書經堯典に、東作を平秩す、とあるに本づく。稻の苗は綠色によく茂り、杏の實は熟して赤くなつた。此時に老いたる親を伴ひ、子供を引き連れて、立ち並んで水車に登つて、歌を歌ひながら水を汲み上げて居る。歌が終るとまた歌が始まる。春の耕作の佳き景色はこれに過ぎたる者は無い。

○ (八五)

遠景を畫面に收容しようとするならば、二階三階な

樓閣を畫く諸法 (八七)

九成宮醜泉銘は、歐陽詢の楷書であり、麻姑仙壇記は顏真卿の楷書である。棚棚は自ら得意なるさま。層層は、こせ／＼とすること。度越は、まさること。剗結は、ちぢかまること。盈丈の卷は、長さ一丈なる卷物。放誕は、思ふまゝに筆をふるふこと。一灑墨は、一たびつけたる墨。得は原本に誤つて博に作る。短尺は、さしがね、ものさし。黍粒を紫ぬとは黍の粒の如き微細なる者を積みかさねること。宋はうつぱり。桷は、たるき。檣檣は、ますがた。紫思は、宮門外の屏。霞のごとく舒ぶとは、きれいに並びたるをいふ。風のごとく動くとは、生き／＼としたるをいふ。層層は幾重にもかさなりたること。折は幾度も屈折すること。可以身入其境也の境の字は原本には工に作る。恐らくは誤ならん。今改む。若し誤ならずとせば、「層層折折として、身を以て入る可し。其の工なるや、絶えて今人の及ぶ可きの

功に非ず」と讀むべきも、境の字の誤とするの妥當なるに如かず。又、身を以て其工に入る可きなり、と讀む説あれども、強解たるを免れず。小心は細心にして綿密なること。放膽は大膽にして思ふに任せ筆を動かすこと。界劃は、けいを引きて書く畫。匠氣は職人の氣風。走滾は、わき道へそれて邪道に入ること。野狐は謂はゆる野狐禪なり。玉律は大切なる法則。入門は入り口である。「畫の中に樓閣があるのは、ちやうど文字の中に九成宮の銘や麻姑壇の記が有るのと同じ。筆が一方に偏り意の放縱なる者は、皆、自ら得意になつて、自分はただこせ／＼とこんな仕事をしようと思はないだけである。若しこんな仕事をしようと思ふならば、必ず古人に優るであらう、と思はない者は無い。けれども、さていよ／＼筆を操つてそれを書いて見ようとする、十本の指は劍のやうにかゝまつてしまつて、一日かかつても一點一畫をも書くことは出来ないのである。故に古人の中で、放誕なること郭恕先の如きは、一

丈にも盈つるほどの長い巻き物に於て、僅に一たび筆をつけて、家屋や樹木を何本でも書きなぐつた。それを見ると、放漫にして法則を無視して居ると謂つても善い。けれども郭恕先が一旦、矩や尺を操つて、黍の粒の如き細小なる者を積み重ねて、精密なる臺閣の圖を畫くときは、宋・桞・檜・檜から不意までも、霞の舒ぶるがごとく奇麗にならび、風の動くがごとく生き／＼としてゐて、微細なる處まで一一これは何あれは何と數へることが出来、幾層にもかさなり、幾たびも屈折して、自分の身を其樓閣の中に入れることが出来るほどである。これは決して今の人の及ぶことの出来る仕事では無い。これによつて、古人は必ず小心から始まつて後に放膽になつたのであることが知られる。古人には、放膽であつて小心でない者は無かつたのである。界劃の畫は職人の氣風の者だといつて、捨てて置いて練習しないで、善い譯では無い。そも／＼界劃の畫は、ちやうど禪宗の戒律のやうな者である。佛道を修行する者

は、必ず先づ戒律から進んで行くべきである。さうすれば、一生、横道にされることは無い。若しさうで無ければ、野狐禪の徒となつてしまふ。それと同じく、界劃の畫は、まことに畫家の貴重なる規律であり、學者の入り口である。

峽 船(九八)

峽船は山間の川を行く船である。川景は四川省即ち蜀の風景である。四川省を略稱して川と曰ふ。山、水を夾むを峽と曰ふ。三峽は蜀と楚との間の大江の中に在り。一は瞿塘峽、一は巫峽、一は西陵峽なり。三峽の中、長さ七百里、兩岸の連山、絶えて斷處無く、江水、峽に東縛せられ、灘多く水急に、舟行甚だ險なり。百尺は恐らくは當に百丈に作るべきならん。百丈は竹を劈きて編みて造りたる綱にして、舟を牽くに用ふ。峽船は、蜀の景を畫くに用ふるに宜しい。三峽に於ては、百尺と名づくる竹の大綱を以て、奔り流るる急湍に逆らつて、船を牽いて遡るの

である。決して吳越の間の平かなる廣き流に用ひてはならぬ。

湖船の式(九九)

湖船は、波の光が練の如く、湖水の漣が未だ起らぬ時に、酒を飲み詩を作るの風景に用ふるに宜し。

槽 船(九九)

槽船は櫓をこいで居る船である。これは、月夜の景及び葭莢の中に畫くに宜しい。人をして之を見れば欸乃を聞くが如き思を起さしめる。

○ (一〇二)

竿を持つたり棋を動かしたりする船は、必ずしも船全體を残らず露はさず、蘆原の中や柳の樹の下に、書き入れて置くときは、自然に、神變不可思議なる龍が首だけを見はして尾を見はしてゐないやうな妙

味がある。然れども書き入れるところの場所を考へることを要する。若し場所が促つて居るのに、畫面一杯に横に一つの舟を畫いて、上下に満ち塞がったならば、何の妙味も無いのである。それ故に只だ船の首をあらはすか又は尾をあらはすかして、全體をあらはさないやうにするが宜しい。餘り有りて盡くすること無き餘情が有るのを妙とするのである。

几席屏榻の諸法 (一〇三)

几は机の類、もたれかかるもの。席は、しきもの。屏は、ついたて。榻は腰かけ。亭は、ちん。あづまや又は風雅なる建物をいふ。榻は屋根のある物見だ。空洞は空虚にして物無きこと。居停は、すまひどころ。服御は手まはりの道具をいふ。相稱はずはつりあはぬこと。既に亭や榻などを畫いたならば、それを空虚にして何にも無いやうにしておくことは出来ない。必ず憑りかゝるべき几や藉いて坐るべき席の設備を要する。これ等の物を畫くには、あま

りに精工にしてはならぬ。あまりに精工であるときは俗である。亦、あまりに無法であつてもならぬ。無法であるときは紊れてしまふ。たとひ山水は甚だ佳く出来、住居も頗る風流に出来たとしても、若し其中の一二の日用品が釣り合はないときは、未だ白壁の微瑕(白いたまの小さいきず)たることを免れない。○すべて家屋が左に向いて居れば、几や榻も左に向ける。家屋が右に向いて居れば、几や榻も右に向ける。側面は側面と合ふやうにする。一尺に盈つるほどの大きい者も、一分ばかりの小さい者も、其の書きかたは皆同じ理法である。

第四册 終

301
40

全傳子芥子園畫傳

第四册 人物屋宇譜

昭和十年十月十五日印
昭和十年十月二十日發行

預約會費
壹圓參拾錢

編輯者	小杉 放庵
編者	公田 達太郎
發行入	北原 義雄
印刷所	東京市豊島區高田南町一丁目一九五 美術印刷株式會社
製本所	東京市中央区西四新町三四 福山印刷製本所
發賣所	東京市中央区西四新町三四 福山書店 電話 牛込四三六〇
發行所	東京市牛込區喜久井町三四 アトリエ社 電話 牛込六四二二番 電話 東京六六〇〇二番

301
40

終